UM☆アルティメットマミさん

いぶりがっこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アルティメットマミさんとは、

全ての魔法少女達を絶望から解放するために誕生した、まったく新しい超ド級乙女である。

忌まわしき事故が起きたあの日、平凡な少女であった巴マミの命を救ったのは、

いつもの訳知り顔の淫獣ではなく、地球の女性たちをこよなく愛する超人だったのだ。

彼女のたわわな果実の奥底に宿る、

【Ｍ（見ちゃイヤン）・Ｏ（乙女）・Ｅ（エナジー）】が爆発する時、

新たな究極少女伝説が幕を開ける。

全ての少女達の希望を背負い、

行け、巴マミ！　戦え、気高き戦士、アルティメットマミさん！

（ＣＶ…古谷徹）

「ワケが分からないよ……」

・

・

・

本作は、「魔法少女まどか☆マギカ」と

「ＵＧ☆アルティメットガール」のクロスＳＳです。
大雑把に言うと、マミさんがエロ酷い目に遭う事によって、
世界が救われる物語を目指しています。
よって、エッチいのは良くないと思われる方、
及びマミさんのファンの方はご注意ください。

目次

一話「もうお嫁に行けないじゃない！」――――1
二話「あなたが死ぬしかないじゃない！」――――14
三話「世界でいちばん強くなるしかないじゃない！」――――31
四話「女子力が息してないじゃない！」――――55
五話「私がイクしかないじゃない！」――――71
最終話「ぜんぜん終わってないじゃない！」――――90

一話「もうお嫁に行けないじゃない！」

――　一見、平和な地球。
有史以来、惑星間戦争や怪獣の襲来と言った危機を持たず、
個別の感情を有した人類たちが、狭い星の上で肩を寄せ合って暮らす世界。
だが、そんな理想郷とも言える人類の歴史の陰には、
とある侵略者を巡る、少女たちの涙で紡がれた記憶があった。
過ぎ去りし遠い時代から、遥けき悠久の未来の果てまで、延々と彼女たちの闘争は続く。
そしてそれは現在、日本のありふれた新興都市・見滝原市の片隅においても……。

「来るよ杏子、気を付けて！」
「～～～ッ　言われなくったって、分かってんだよ！」
いびつに歪んだ花園の奥底で、揺らめく胡蝶の群れが侵入者へ向けて一斉に牙を剥く。
真紅のポニーテールをたなびかせ、少女がその身に似合わぬ大槍を振り回す。
長柄は直ちに多節の棍を形成し、痛烈な旋風を以て土塊を巻き上げる。
土埃に揺らめく視線の先で、巨大な臓腑でもコラージュしたかのような異形がその影を成す。
チィッ、と少女が一つ舌打ちをする。
【魔法少女】と【魔女】、
魔女は恐怖と絶望を振り撒きながら人類に災厄をもたらし、
魔法少女は得物を振るい、魔女を屠ってその糧とする。
魔法と言う概念を加えてなお揺らぐ事の無い、食物連鎖と言う生態系の縮図。
だが、その頂点に立つ魔法少女もまた、絶対と言える立場ではない。

魔法少女は生き延びるため、魔女を狩り続けなければならないが、
その魔女もまた、魔法少女に抗するだけの牙を有しているのだ。
戦うためには力を振るわねばならず、力を得るためには戦い続けねばならない。
薬草を求めて毒沼を彷徨うが如き不毛な行為が、
未熟な少女たちの精神と肉体をじわじわと蝕んでいく……。
「――ッ!?」
束の間の思考の壁を突き破り、異形の連ねた触手が一直線に穂先を捉える。
たちまち少女の視界が一回転し、小柄な身体が容赦なく壁面へと叩きつけられる。
「カハッ！」
「今のはまずいよ、杏子、何か手を考えないと……」
「……いちいち五月蠅いんだよ、お前は」
足元の珍獣相手に毒付きながら、手にした得物を杖代わりにかろうじて立ち上がる。
白兵から中遠距離戦にまで幅広く対応できる大槍は、
一匹狼を気取る少女、佐倉杏子にとって、本来ならば最適の選択と言えるのであろうが、
それも連戦によるダメージが重なっているとなれば、十全に生かす事は叶わない。
「――危ない！　避けてッ！」
「何、うっ……！」
突如、横合いからの悲鳴と衝撃を浴びて、杏子の体が真横に転がる。
間を空けず胡蝶の群れが一直線に脇を掠め、震える空気がビリビリと頬を打つ。
「ふうっ、か、間一髪だったわね」
「間一髪って、お、お前……」
頭を一つ振るい、強烈なタックルを噛ましてくれた乱入者の姿を改めて見つめ直す。
歳の頃は杏子より一つ二つ上と言った所であろうか。

柔らかな金髪のロールが印象的な、均勢の整った顔立ちの少女、
ややあどけない表情とは不釣り合いなふくよかな肉体が、
クリーム色のブラウスとチェックのスカートの奥で控えめに自己主張する。
「その制服は、この辺の……、って、バ、バカッ!?
一般人がこんな所に首突っ込んでどうしようってんだ!?」
「ええ？　だ、だって私、その……」
『あの怪獣を倒すに決まっているだろうッ！』
「う、うぉ!?」
突如として会話に割り込んできた、古谷徹風の張りのあるボイスを耳にして、
反射的に杏子が身構える。
振り向いた少女の眼前にいたのは、サッカーボール大の丸っこい銀色のマスクを被り、
コンパクトなＵＦＯ?らしきものに乗って浮遊する、極めて胡散臭い生物であった。
「お前ら……、一体、何なんだ？
見た所、魔女や使い魔の類ってワケでも無さそうだが？」
『私は正義のヒーロー、ＵＦＯマン！
と言うか、今はそんな込み入った話をしている場合ではない。
巴マミ、早速だがこれを握るんだ！』
会話もそこそこに突如、ＵＦＯマンがＵＦＯの下腹部より見事なイチモ……、
もとい男性的な形状のグリップをニュインと伸ばす。
たちまち年頃の少女たちの顔面が爆発し、ひいっとばかりに後ずさる。
『こいつを握り、私と　合　体　するのだ、巴マミ！
ＵＦＯマン子に変身して、一気にアイツを叩き潰すぞ』
「合体……、ＵＦＯマ……、バ、バカかお前ッ!?
消されちまったらどうするつもりだ!!」
『ええい、部外者は黙っていろ！　これは私とマミの問題なのだ！』

だが、巴マミと呼ばれた金髪の少女もまた、
ピコピコと周囲を威圧する大業物を前に、まるでぐずるようにイヤイヤと首を振るった。
「ムリ、無理よＵＦＯマン。
だって、人がいるなんて私、聞いてないもの……、
こんな同世代の女の子の前で変身なんて、出来るワケないじゃない！」
『何を言っているんだマミ、
女の子がいるなら、正義の味方としては尚更助けなきゃならないだろうが！
確かにこんなケースは我々にとっても初めての事だが、
後はもう、高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応していくしかあるまい』
「行き当たりばったりにも程があるわよォ～!!」
巴マミはしばし、謎の少女と謎の珍獣、
それに彼方の怪物とＵＦＯマンのイチモ……もといをぐるりと見回していたが、
やがてがくりとうなだれて、ぷっくりした頬にひと雫の涙をこぼした。
「……分かった、分かったわよ、変身、すればいいんでしょう？」
『おお！　やってくれるか、それでこそ僕らのマミさんだ！』
か細い両肩を震わして、巴マミが右手をゆっくりと伸ばす。
白磁のように可憐な指先がナニへと触れた瞬間、それは起こった。
『ＵＦＯマン！　イキまーっす！』
「へ、変し……、きゃあっ!?」
勢い漲るＵＦＯマンの雄叫びと共に、
迸る熱いパトスが白色のエナジーと化して、マミさんの全身にぶっかけられる。
艶やかな金髪が、恥辱に歪む眉が、形の良い鼻先が、ふくよかな頬が、
たわわな二つの果実が、むちむちと肉付きの良い両腿が、

欲望のままに白色のドロドロに染め上げられていく。
「なっ、こ、これは……！」
「変身だって？　まさか僕ら以外の知的生命体が、
人類に対してコンタクトを試みていたとでも言うのかい？」
壮麗なマミさんのテーマが流れる中、
呆然と見上げる二人の前で、少女の全身が輝きながら膨張を始める。
ブラウスのボタンを勢い良く弾き飛ばして、重量級のボインがぼよよ～んと爆ぜ、
安産型のヒップがズオオッとばかりに凄みを増し、
濃色のタイツをマニアックに引き裂いてムッチムチの御神脚が現出する。
やがて、マミさんの巨大チャーミングおデコが謎ヘッドギアに包まれると、
そこに若干賢者モード入ったＵＦＯマンが吸い込まれて行く。
全ての光が消え去った時、そこには黄白のツートンスーツにその身を包んだ、
超ド級マミさんの姿があった。
内股気味に構えた十数メートル級の巨大乙女を前に、
歪んだ楽園の主も警戒を露にし、直ちに胡蝶の群れを走らせる。
『来るぞ、マミ、迎撃だ！』
「……ようし、ティロ・フィナーレ！（物理）」
――　ドワォ!!
謎の技名と同時に天空から打ち下ろされた鉄拳が大地を貫き、
轟音と衝撃波が使い魔の群れを諸共に蹴散らす。
花園をたちまち無残なクレーターに替える一撃に、居合わせた一同が絶句する。
表情なき異形にも、危機感というものはあるのだろうか？
肉弾戦の愚を悟り、その背に外見と不釣合いな蝶の羽を広げ始める。
『――アイツ、あの巨体で飛ぶ気か？

イカンぞマミ、上から攻められてはＵＦＯマン子はお手上げだ』
「わ、分かってるわよ」
ズン、ズン、ズン、と滞空時間の長い乙女走りで大地を揺らし、
息せき切ってジャイアントマミが走る。
力強く大地を蹴り上げ、渾身のスピアーでもって異形を結界の隅へ
と叩き付ける。
「に、逃がさないんだから」
『マ ミ さ ん ブ リ ー ガ ー!! 死ねぇ！』
「やめて！ 恥ずかしい技名を叫ばないでッ!?」
ノリノリの異星人にツッコミを入れつつ、両腕を回してガチリと
ロックする。
恐らく有史以来最強のだいしゅきホールドに捕われて、
さしもの異形も全身を激しく痙攣させる。
「べ、ベアハッグだと!?
アイツ、魔女のあの巨体を吊上げるつもりなのか！
しかもあの巨大な胸で圧迫して……、あれでは魔女も呼吸ができな
い!!」
「ノリノリだね佐倉杏子。
でも多分、魔女は呼吸なんてしないと思うよ」
「細かい事はいいんだよ、とにかくこれはもう決着だよ」
「……いや、あれを見て、大ピンチだよ！」
「？ 一体何を言って……、うっ!?
バ、バッキャロー！ 何考えてやがるんだ!?」
「……え？ って、え！ ええええええええええ!?」
杏子の必死のヤジを受け、マミさんもようやく自身の状態に気が付
いた。
ピコーン、ピコーンという危ないタイマーの響きと共に、
少女の巨大な全身を包んでいたスーツが蕩け始め、
そこかしこに大穴を広げつつあったのだ。
抜けるように白い肌が徐々に露わとなり、超ド級安産型のピーチが
プリンと踊り、

拘束を解かれたワガママボインが自己主張を始める。
「隠せバカ!?　R―15で効かなくなっちまうぞ！」
「ちょ、ちょちょちょちょっとUFOマン！　どうなってるの!?」
『どうもこうもない、いつもの時間切れだ。
このままではヘンタ、もといタイヘンな事になる』
「嘘！　だっていつもより早いわよ」
『乳マミさんは伊達じゃない』
「くぅっ！」
かってない恥辱に顔を歪ませながら、足元でヤジを飛ばす少女をちらりと見つめる。
（ああ……、あの子、杏子とか言ったっけ？
よく見たら彼女、すっごいイケてるファッションじゃない。
私の好みとはちょっと違うけど、でも世界観を崩さない程度にスタイリッシュで、
何て言うか、いかにも今時の戦うヒロインって感じだわ。
そ、それに引きかえ……）
改めて自分の姿を見直す。
本来女の子が着るべき物ではない、全身タイツの延長上にある前時代的なスーツ。
いや、それすらも今となっては、ただの黄色と白のヌルヌルしたヒモでしかない。
「うぐっ、私、私だってぇ……」
少女の大きな瞳から、一筋の理想が淡い雫となって大地に零れ落ちる。
本物の魔法少女・佐倉杏子との邂逅が、乙女の中の神秘を未知の領域へと導いて行く。
「私だって！　カッコカワいい魔法少女になりたかったのにいいィ～～～!!!!」
『おおっ、M・O・E　マックスかッ！』
少女の魂の叫びと共に、その全身から再び謎のエナジーが溢れ出し、

痛烈な白色の閃光が花園を包み込む。
「――ッ！　何の光!?」
「凄い、このエネルギー、彼女もまたエントロピーを凌駕した存在なのか」
『説明しよう！
ＵＦＯマン子は、巴マミのＭ（見ちゃイヤン）Ｏ（乙女）Ｅ（エナジー）を
エネルギーに変えて戦う超人である。
彼女の中の、イヤ～ン、見ちゃダメ～と言う恥じらい、
すなわち羞恥心が最高潮に達した時、
ＵＦＯマン子は秘めたポテンシャルの全てを発揮できるのだ』
「じ、自分で説明するのかよ……」

「ティロ……！　フィナァァレエエエエエエ――――ッ!!（物理）」

決死の雄叫びに呼応して、巨大少女のしなやかな肢体が芸術的なアーチを描き、
半回転した異形の巨体が頭から花園に陥没する。
もしもこの場にアレキサンドリア・ミートがいたならば、
惜しみない賞賛を送ったに違いない、乙女渾身のバックドロップ。
ピンと伸びた二つの爪先の間から、超ド級マミさんの壮大な観音様が如来する!!
「わ～～～～っ!?　けっこう!!」
「セリフのチョイスはそれで良いのかい、佐倉杏子？
ああ、でも確かこの場合は『永井先生ゴメンなさい』だったかな？」
「い　や　あ　あ　あ　あ　あ　～～～！」
鳴り止まぬ少女の慟哭と共に、エナジーはその輝きを一層に増し、
世界を完全なる白色へと染め上げ、そして……！
――そして光が費えた時、忌まわしき魔女の結界もまた消滅していた。

「うっ、ぅう……」
　全ての力を使い果たし平凡な女子中学生に戻った巴マミが、
　その生まれたままの姿で、ぺたりと路地裏に腰を下ろす。
『やったな、巴マミ！　これまでの中でも最高にイカした大活躍だったぞ！』
「――ッ！」
　喜色満面で駆けつけたＵＦＯマンが、そのＫＹぶりを遺憾なくした瞬間、
　不意にマミが壊れた。
泣く、
マミが泣く、
「う、ひぐっ、ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～ん!!」
満点の星空を仰ぎ、巴マミが号泣する。
数多の平行世界で垣間見た、かつての優雅さの欠片もない無様な姿。
大粒の涙をボロボロとこぼし、鼻水で顔面をグシャグシャにして、
プライドの全てを打ち捨てて、年端もいかない童女のように悲しみの声を上げる。
もしも今、彼女が魔法少女であったならば、そのソウルジェムは即座にドス黒く染まり、
全宇宙を消滅させる災厄の魔女が光臨していたに違いない。
だが、今の彼女は単なるすっぽんぽんの女の子。
呪いも絶望も、ただ悲しみとなって空しく中空に掻き消えるしかないのだ。
『おおっ、嬉し泣きか！
　分かるぞマミ、なにせあれだけの死闘を制した後だからな！』
「ちが、違うわよバカァ！　あんな姿、他人に見られちゃうなんて……、
　こんなんじゃ私、もう、お嫁に行けないじゃないっ!?」
『何を言うか！　君以上にチャーミングなヒロインなんて、

この地球上にはそんざイギャアァ――ッ！』
ＵＦＯマンの言葉は最後まで続かなかった。
突如として横合いから飛んできた鉄拳が横っ面を捉え、
その身を彼方までぶっ飛ばしたのだ。
「こんのッ　外道がァ――ッ！」
「え……？」
思わず泣き声が止め、巴マミがおずおずと横合いを見上げる。
憤怒の形相で拳を握り締めていたのは、件の魔法少女・佐倉杏子。
事情も分からない、状況も、もちろん分からない。
だが、杏子の中の隠し切れない熱血系狂犬ヒーローとしての資質は、
本能的にＵＦＯマンをぶん殴る事を選んだのだ。
『な、殴ったね！　親父にもぶたれた事ないのにッ！』
「五月蝿い！　お前はそれが言いたいだけだろうがッ！
年頃の女の子相手に何て事しやがるッ!?」
『に、二度もぶった……』
「黙ってろ！」
呆然とする全裸の少女を置き去りにして、
たちまち魔法少女と異星人のどつき漫才が繰り広げられる。
その間隙を縫うようにして、笑ゥせえるす系マスコットの魔の手がしなやかに迫る。
「……それにしても、君たちには驚かされるばかりだね。
まさか魔法少女以外に、あの魔女を倒せる人間がいるなんてね」
「え……？　魔女、って？」
「知らずに戦っていたって言うのかい？
さっき君が倒した怪物の通称が【魔女】、
結界の奥に潜み、呪いと言う形で人々の不安を煽る人類の敵だ。
そして、その魔女に立ち向かうのが彼女たち【魔法少女】と言う訳さ」
「魔女に、魔法少女……」
「巴マミって言ったよね。

どうやら君にも、向こうの杏子に匹敵する資質があるみたいだ。
僕の名前はキュゥべえ！
どうだい、僕と契約して、魔法少女に鞍替えしてみる気はないかい？
そうすれば一つだけ、どんな願い事でも叶えてあげる！」
「わ、私の願い事を？」
「そう、例えば『あのヘンテコな宇宙人と、縁が切れますように』とか……」
『ってオイッ!?　待て待て待て待て～いッ！』
第一話にして早くも訪れた破局の危機を前に、
全速力でヘンテコ宇宙人が割り込んでくる。
『この淫獣め！
ウチのマミさんに良からぬ事を吹き込みやがって、
一体ナニを企んでいやがる』
「これは心外だな。
僕はただ、今の状況に苦しんでいる彼女に対して、
少しでも一助になるような可能性を提案しているだけだよ」
「魔法少女、わ、私が……」
『騙されるな巴マミ！
こんないかがわしい奴と契約したが最後、即座に魂まで抜き取られて、
まるで家畜のような惨めな扱いを受けるに違いないのだ！』
「やれやれ、こんな特大のブーメランは初めて見たな。
僕の事をとやかく言う前に、
まずは今日一日の自分を振り返ってみる事をお勧めするよ」
「ホレ見ろ！　やっぱりお前が悪党じゃねえかッ！」
『違うの！　アイツは本当に人類の敵なの！
お願い、信じてマミさん！』
「ええっと、あ、あの……」
おずおずとためらいがちに、マミがいかがわしい宇宙人の弁護を始める。

「もう、それくらいで勘弁してやって頂戴。
確かにコイツは、スケベでクズでいいかげんなお調子者なんだけど、
それでも悲しい事に、一応は本当に正義の味方で、
しかもよりによって、正真正銘、私たち家族の命の恩人なのよ……」
「〜〜ッ！　納得できるか、そんなモン」
「きゃっ！」
吐き捨てるような言葉と共に、杏子が上着を脱ぎ捨てマミへと投げつける。
「あ……、これ」
「アンタ、巴マミ、とか言ったっけ？
取り敢えずは私のヤサに寄ってきなよ。
どんな形でも借りは借りだ、服くらいどっかから調達してきてやるよ」
「あ、ありがとう、ええっと……」
「佐倉杏子。
まあ、アンタが魔法少女じゃないって言うなら、
かえって色々と共闘できる所もあるだろうしね……。
また何かあったら、遠慮なく声を掛けてくれりゃあいいさ」
「本当!?　ありがとう、ありがとう佐倉さん……！」
「お、おい!?　何も泣くほどの事じゃないだろうが！
ったく、いいから洟ふけよ洟」
「ぶひゅう！　あ、あいがと……」

——これが、寂しがり屋のマミと、一匹狼気取りの杏子との出会いの夜であった。
そして、【超人】と【魔法少女】の邂逅が果たされたこの日より、
地球の運命は大きく流転する事となるのである。
『——巴マミの戦いは続く、
だが、今や彼女の手の上には、友情と言う名の新たな力が芽生え始

めていた。
もう恐れるものは何も無い。
さあ行け！　運命の少女・巴マミ、戦え！　正義の戦士ＵＦＯマン子……』
「……ってオイ！
どさくさに話を丸めようとしてるんじゃねえ！」
「ワケが分からないよ」

二話「あなたが死ぬしかないじゃない！」

『起きるのだ、巴マミよ』
「ン……」
どこか懐かしい響きを持った男の声に促され、巴マミがその瞳を開ける。
ゆっくりと辺りを見渡すと、そこに広がっていたのは、
奇妙に揺らめく赤一色の世界であった。
上も下も右も左も分からない奇妙な空間を、
まるで羊水のプールにでも揺られるように呆然と漂う。
『目覚めたか、巴マミ』
「あなた、は……？」
かろうじて頭を上げて、声のした方向を見上げる。
そこに居たのは赤色のスーツと銀色のマスクに身を包んだ巨人。
その身の丈に反し、不思議と威圧感は感じない。
『落ち着いて聞くのだ巴マミ、実は君は、既に死んでしまったのだ』
「……死んだ、私、が？」
『ああ、実に痛ましい、だがこの星においてはありふれた事故の一つによってな』
巨人の声を反芻するように、マミが在りし日の記憶の糸を辿る。
最後に脳裏に焼き付いていたのは、玄関のドアを開ける両親の笑顔。
「……お父さんとお母さんは？　私の家族はどうなったの？」
『――残念だが、私が発見した時には、もう……』
「そんな、そんな事って……」
『いや、悲しむ必要は無い。
私の肉体と魂の一部を分け与えさえすれば、
君たち家族は蘇る事ができる、もう一度人生をやり直せるのだ』
「ほ、本当に？」
『ああ、ただしそのためには、私の頼みを聞いてもらわねばならない』
「あなたの、頼み？」

『ふっふっふっふ……』
いかがわしい巨人の笑い声と共に、揺らめく空間に光が満ち始める。
白色が網膜を埋め尽くす寸前、巴マミはその声を聞いた。
『僕と契約して、ＵＦＯマン子になってよ！』
・
・
・
「いやあああああああああああああああ――――ッ!!??」
喉が張り裂けんばかりの絶叫を上げ、巴マミはベッドから跳ね上がった。
『どうしたマミさん！　何だか凄いうなされていたぞ』
「あ……、ＵＦＯマン」
はあはあと大きく息をついて周囲を見渡す。
何の変哲も無い夕暮れの自室。
そして目の前には、かつての面影も無残な二頭身のマスコットの姿。
「夢……、そう、悪い夢をみたの、
ああ、でもそれは夢じゃなくって……！」
『泣くな巴マミ、
大丈夫、君が辛い時には、いつだって私が傍についているぞ』
「ぐすっ、ありがとうＵＦＯマン、でも私はそれが嫌なの」
よろよろとベッドから起き上がり、力なく机の上に突っ伏す。
「ねえＵＦＯマン、どうしても私が戦わなければならないの？」
『――これは何度も話した事だがな、マミ。
私が地球を訪れたのは、人類の力を悪用せんとする者から、君たちを守るためだった。
Ｍ．Ｏ．Ｅ．や魔法少女の祈りに限った話ではないが、
君たち人間の感情が生み出す膨大なエネルギーは、
一部の邪な者たちにとっては格好の資源、あるいは食料となり得るからな』

「ええ……」
『だが着任早々、私は君たち親子を救うために、自らの肉体を分け与えてしまった。
一人では変身できない身体になってしまったのだ。
あの強大な魔女の力に対抗する為には、
どうしても君の協力が、ＵＦＯマン子の力が必要なんだ』
「……本当に私でなくちゃダメなの？」
何かもっと、他に良い方法は無いの？」
『ギクゥッ！』
「ああーっ！　今『ギクゥッ！』って言ったわねッ！」
巴マミがガバチョと立ち上がり、たちまち涙目でＵＦＯマンへと詰め寄る。
「非道い、非道いわＵＦＯマンッ！　やっぱり何かと理由をつけて、
私をエロ酷い目に合わせたかっただけなのね！　同人誌みたいに!!」
『違う！　誤解だマミさん、私はただ君たち一家の被るリスクを考えてだな』
「五月蝿いわよ、バカ、バカ、バカァ～～～！
もう、早くその別の方法ってのを教えなさいよォ～」
『……そこまで言うなら仕方ないな。
巴マミ、私は君たち家族に肉体の一部を分け与え、結果、
一人では変身できない体になってしまったワケだが』
「……？　それが、どうかしたの？」
『私と合体するのは、別に君じゃなくても構わない。
つまり、君のお父上かお母君に……』
「やめてぇ!?　こんなしょうもない事に家族を巻き込まないで！」
『私だって嫌だ。
ママママさんはとにかくとして、巨大ナイスミドルの全裸なんて誰が得をするんだ。
一家の大黒柱がわいせつ物陳列罪で捕まった日には、社会的リスクも半端ないしな』

おお、と声にならない嗚咽を漏らして、へなへなとマミの腰が砕ける。
「……どうあっても、私が戦わなくちゃならないって事なのね。
嗚呼、せめて佐倉さんみたいなカッコいい魔法少女になりたかった」
『ヨソはヨソ、ウチはウチだよマミ。
彼女たちにもきっと、彼女たちなりの労苦があるに違いないのだ』
「……それは、そうかもしれないけれど」
ちらりとマミの脳裏に、数少ない理解者である佐倉杏子の姿が浮かぶ。
一見、サバサバと割り切った性格に見えた彼女であったが、
そんな気持ちの良い少女であっても、
魔法少女にしか理解できない悩みを抱えているというのであろうか？
『そんな事よりマミ、私はもうお腹がペコちゃんだ。
早いところ夕飯にして、夜のパトロールに行こうぜ』
「はいはい、何か持ってきてあげるから、少しだけ大人しくしててよね」
『ンッン～、マママミさんの手料理、何かな何かな～？』
「もう……」
どこまでもお気楽な正義のヒーローの姿を前に、巴マミは再び深くため息をついた……。
・
・
・
――ＰＭ７：００、見滝原市内某所。
工業地帯にほど近い廃ビルのさらにその奥、
人目には決して触れる事の無い迷宮の奥深くを、黒髪をなびかせ一人の少女が悠然と突き進む。
魔法少女・暁美ほむら、別時空のキュゥべえ曰く「時間遡行者」
限定的に時間を操る能力を有し、

絶望的な盤上から唯一絶対の詰み筋を求め、永劫の時間を繰り返す少女。
戻した時の長さと等量の魔女を屠り、等量の少女たちの涙に触れ、
心まで兵器の一部に同化しつつある彼女にとって、
結界内の探索は既に、日常の一部と言っていい行為ではあったものの、
その日の彼女は珍しく、自身の内の波立つ感情を持て余しているようであった。
（……イレギュラーが多すぎる）
危険極まりない魔女のホームにありながら、それでも胸中湧き上がる雑念を抑えきれない。
バタフライエフェクト。
風が吹けば桶屋が儲かる。
繰り返す世界の中で、自らの選択がもたらす因果の結末を見続けてきた少女である。
彼女の歩む道程は、決して馴染んだ風景という訳ではない。
極端な話、目覚めた彼女がベッドから降りる時、右足と左足のどちらから踏み出すか、
そんな些末な選択の一つ一つによって、運命はその姿を変容させかねないのだ。
（けれど、それにしたって……）
不測の事態が多すぎる。
早すぎる魔女の目覚めに加え、
今の彼女は警戒する敵は愚か、守るべき最愛の友の姿までも見失ってしまっている。
ここまで来ると、自身の不始末だけで説明しきれるものではない。
にわかには考え難い可能性ではあるが、これではまるで、前提が狂っているとしか……、
「――！」
後背より迫る気配に、扉に掛けた右手がピタリと止まる。
魔力を持たぬ人間には目にすることも叶わぬ結界の奥である。

今宵、ここまで侵入しうる魔法少女は二人、
だがその片割れである佐倉杏子にとって、ここは「縄張り」の外、
この、今宵生まれたばかりの魔女を狙いに来るとしても、駆けつけるのはしばらく先であろう。
「……と、なると、やはりあなたでしょうね。
巴マ……っえ！　えええええええっ!?」
と、万全の分析をもって背後を振り返ったほむらであったが、
次の瞬間、全力でキャラが崩壊するほどの、素っ頓狂な叫び声をあげるハメになった。
「ハァ……、ハァ……、ま、また新しい魔法少女、なの？」
「マ、マミさ……、巴、マミ……？」
「……えっ？　な、何であなた、私の名前を知って……？」
「――ッ！　そんな事はどうでもいい！
それよりも巴マミ、あなた……、あなたなんで　全　裸　なのよッ!?」
新手の魔法少女からの、至極当然な反応を受け、マミの両肩が思わずビクン、と震える。
「うっ、ひぐっ、だ、だって仕方ないじゃない。
変身の度に服が破れるなら、先に脱ぐしか無いじゃないッ!?」
「一体、何を言っているのよ？
結界の中に変身もせず、って言うか服すら着ないで来るなんて、あなた正気なの？」
「へ、変身？　する、するって言ってるでしょ！
だから全部、脱いで来たんじゃないの！」
「あなた、一体……」
『ええい！　今はそんな問答をしている場合か!?』
「――!?」
突如として二人の間に割って入ってきた謎の生物に、ほむらの体が硬直する。
『時間が惜しい！　ここで　合　体　して突っ込むぞ、マミ！』
「ま、また知らない女の子の前で!?」

『もう素っ裸を見られちゃってるでしょ！
これ以上、何が恥ずかしいって言うの!?』
「うう……、もう、どんどんこの状況に慣れていく自分がイヤァ～」
思考停止に陥ったほむらの眼前で、ＵＦＯマンが漢の魔法ステッキを勢い良く伸ばす。
必死に胸元を隠しながら、巴マミが震える片手をブツへと伸ばす。
『ふぉおおおおぉぉ!!　萌え上がれ！　マミの小宇宙ォ!!』
「セ、セインティア～ッ!!」
性座の神話に導かれ、ＵＦＯマンの小宇宙がマミの一糸纏わぬ肢体に降り注ぐ。
壮麗なマミさんのテーマが流れる中、
リビドー溢れるベトベターが乙女の柔肌に浸透し、
純情に膨らむ胸が、未来を背負う尻が、浪漫を駆ける太腿が強大なパワーに漲って行く。
『変身！　ＵＦＯマン子、見参！』
「い、いきま……、キャッ!?」
失敗であった。
巨大な桃尻が思い切り扉につかえ、先に進めない。
『し、しまった！　せめて扉を開けてから変身するべきだった!?』
「バ、バカァ～、どうするのよこれェ～!?」
『ええい、時間が惜しい！　とにかく力づくでブッこ抜くんだ!!』
巨大な雌豹と化した乙女が、力の限り思いきりケツを振るぅ。
刹那、扉が結界の一部ごとぶっ壊れ、勢いのままゴロンゴロンと乙女が転がる。
「マ、マミさ……、一体……」
かろうじて、ほむらがポツリと呟く。
その時の彼女は、地響きを鳴らして遠ざかっていくケツを、ただ茫然と見送るしかなかった。
・
・
・

ほむらとマミがシュールな禅問答を繰り広げていたその頃、
結界の最深部には、流転する光景に戸惑う少女たちの姿があった。
「さやかちゃん……、こ、これって？」
「うん、何か、ずいぶんとフンイキが変わっちゃったけど」
恐る恐る周辺を見渡す。
天井が見えないほどの吹き抜けの空間には、
まるでパースでも違えたかのようなお菓子の山。
その非現実的な世界は、迷い込んだヘンゼルとグレーテルを戸惑わせるばかりである。
鹿目まどかに美樹さやか。
この世界、この時間軸においては、未だ普通の女子中学生に過ぎない少女たち。
本来ならば、たまたま魔女の結界に飲み込まれただけの彼女たちに、
舞台の終焉にまで辿り着ける力があろう筈もない。
単なる偶然か？　あるいはこの部屋の主に気紛れによって招かれたのか？
「――！　まどか、あそこ見て」
青髪の少女に促され、その指先を目で追いかける。
日常生活には不向きな小高いテーブルの上には、愛らしいぬいぐるみがくたりと座る。
ここがファンシーショップの一角ならば見逃したであろう光景だが、
なぜだか今の二人は、そのありふれた小物から目が離せない。
――と、
ズン！　ズン！　ズン！
「さ、さやかちゃん!?」
「地震かよ!?　こ、こんな所で……」
彼方から伝わる地響きに、不安げに二人が身を寄せ合う。
だが、その内に異常に気付く。
地鳴りは通常の地震とは異なり、一定の間隔を刻みながら二人を襲

う。
　さらに注意深く探るならば、地響は徐々に大きく、まるで二人の下に迫るかのように……！
「――!?　危ないまどか！　入口から離れてッ！」
「ふぇ……、ひゃ！　ひゃあああ～!?」
「ティロ・フィナーレ!!（物理）」
――ドワォ!!
謎の技名と同時に渾身のぶちかましが炸裂し、
結界をシリアスな雰囲気ごと破壊しながら、巨大乙女が室内に乱入する。
『うぉ!?　ま、またなんか女の子がいるぞ』
「危ない！　二人ともそいつに近寄らないで!!」
「ひょえぇ～！　ど、どっちがッ!?」
慌てふためく少女たちを内股で飛び越え、懸命な乙女走りがお菓子の館を揺らす。
標的の前で踏み止まっては腰を落とし、その右掌を獲物目がけて思いきりカチ上げる。
『どすこ～い！』
「ティ……、ティロ・フィナーレ!!（物理）」
――ズワォ!!
平行世界の列車砲もかくやと言うほどのテッポウが爆音を巻き起こし、
一足遅れの衝撃波が室内に吹き荒れる。
その暴力の前にちっぽけなぬいぐるみなどは一たまりもなく、たちまちその身を爆裂四散させる。
『――やったか!?』
「みよ、妙なフラグを立てないで……って、え？」
異変はその時起こった。
爆散したぬいぐるみから飛び出したもやもやが中空で渦を巻き、

モコモコとトゥーン・アニメのように奇妙な生物の姿を形作り始める。
　茫然と立ち竦む巨大乙女の眼前で、原色系の空飛ぶツチノコが、愛嬌溢れる大口を開いて……。

・

・

・

「キャァアアアアアアァァ――――ッ!?」
「――！」
　彼方から響く少女たちの悲鳴を耳にして、ようやく暁美ほむらは我に返った。
　迷いなく踵を返し、台風一過のような迷宮の奥地へと突入する。
（不覚……、不測の事態が重なったとはとは言え、巴マミの先行を許してしまうなんて……）
　迷宮を駆けながら、ぎりりと奥歯を噛み締める。
　かっての時間軸において、常にベテランの魔法少女として皆を導いてきた巴マミ、
　その戦闘力については折り紙付きの彼女にとって、唯一天敵とも呼べるのが、
　攻撃力と再生能力に特化し、騙し討ちを得意とするこの館の主であったのだ。
　ここで彼女を失う事となれば、この時間軸もまた、これまでの徒労の繰り返しとなるであろう。
（いいえ、それだけではない、さっきの悲鳴は……！）
「――まどかッ！」
　と、決死の形相でもって、最深部へと踏み込んだ少女であったが……、
　次の瞬間、ようやく立て直したキャラクターがぶっ壊れるほどに全力でズッこけるハメになった。
「くうぅぅぅっ、コ、コイツゥ……」
『しっかりしろォ巴マミ！　こんなものただのヌルヌルしたヒモだッ

!!』
「む、ムリ言わないでよ、下手に動いたらこぼれちゃうじゃない」
『分かってんの、このままだとまた全裸なんだよ!? ポロリとか気にしてる場合かーっ!?』
「そうだァー! 戦えマミさん、あんたの実力はそんなもんかー?」
「ちょ、落ち着いてさやかちゃん、私たちまだそんな関係じゃないよ!?」
「……」
呆然と、眼前で繰り広げられている茶番を見上げる。
コブラツイスト、コブラツイストである。
巨大な乙女が、コブラっぽい魔女にコブラっぽいツイストを仕掛けられている。
いや、より端的に言うならば、でっかいマミさんが緊縛プレイを仕掛けられている。
暁美ほむらがエロコメ世界に馴染めないままにも物語は進む。
調子こいたツチノコ魔女が、いかにもトゥーンめいた動きでマミさんの全身を駆け回り、
直後、乙女の全身が叉焼のように中空に吊り上げられる。
『き、亀甲縛りだと!? コイツ、何でもありにもほどがあるだろ!』
「ひあぁぁ〜、お、降ろしてぇ〜!!」
顔面を真っ赤に沸騰させて、巨大乙女が必死に全身を揺する。
その度に食い破られたスーツから駄肉がこぼれ、
原色ロープの隙間から、むちむちポークがポロリと溢れ出す。
「あ、嗚呼……」
はらはらと、知らずほむらの両目から涙が零れ落ちる。
そんな感情が自分の中に残っていた事自体が驚きであった。
かつて、頼れる先輩として自分を導いてくれた巴マミ。
最強魔法少女の名に恥じず、可憐な必殺技の数々で魔女を葬り去ってきた巴マミ。
その身の孤独を覆い隠し、決死の勇気で敵に立ち向かい続けた、誇り高き巴マミ。

巴マミは死んだのだ。
いくら時間を巻き戻したとしても、あの頃の気高く可憐で美しかった彼女はもういない。
「マ、マミ……、巴、マ、ミ」
「――ハッ」
よろよろと、力なくほむらが歩み寄る。
茫漠とした光宿らぬ漆黒の瞳が、巨大な乙女の視線を鷲掴みにする。
「あなた、あなたは一体何がしたいの？
半裸でこんな……、まるで屠殺場の子豚みたいになって……」
「あ、あわわ……、あぅ……」
じわり、とマミの背に、これまでとは違った種類の背脂が溢れ出す。
（あ……、あの瞳、あの色はきっと、『幻滅』だとか『失望』だとか言った類のモノだわ。
『テメーにゃほとほとガッカリだよ』
逢った事もない女の子なのに、彼女の瞳が、そう如実に語っている……）
かつてない恥辱に、かつてない絶望に、少女の眉が無様に歪む。
「ち、違うの！　これは、これは違うのォッ!!」
『ええい、何をワケの分からん言い訳をしている!?
いいから戦え、巴マミ！』
「み、見ないでぇ!?　今の私を見ないでぇ～っ!!」
『おおっ、何だか知らんがイキナリM・O・Eマックスだ！』
溢れ出す金色のエナジーがエントロピーを飛び越して、
ヌルヌルしたヒモを引き千切る剛腕に変わる。
大股で大地を踏みしめ、コミカルに焦る魔女に目がけてキッとガンを飛ばす。
少女の怒りが肉体に連動して大地を走り、天空へ伸びる拳が光速を超える。
「こんのオォォ……、テ　ィ　ロ　・　フ　ィ　ナ　ー　レ　エ――――ッ!!（物理）」

ＢＡＧＯＯＯＯＯＯＮ!!

　実にトゥーンな爆音を響かせ、乙女全身全霊の一撃を受けた魔女が天空へと舞い上がる。

「ジェットアッパー！　ジェットアッパーだよまどか!!
　すごい、奇跡も車田ぶっ飛びもあるんだよッ！」

「こ、こんなの絶対おかしいよ……」

「――！　いけないマミさん、そいつは再せ……」

「ティロォ!!（物理）」

　ほむらの叫びを遮って、いち早く上空に飛んだマミさんの拳が、すでに脱皮を始めていたトゥーンの顔面を的確に捉える。

「ティロ！　ティロ！　ティロ！　ティロ！　ティロ！　ティローッ！（物理）」

「け、結界のコーナーに追い詰めて左右の連打……、
　巴マミ、あなた本当にどうしてしまったって言うの？」

「まっみのうち！　まっみのうち！」

「調子に乗りすぎだよさやかちゃん!?　ずっとそのキャラで行く気？」

『燃え上がれ小宇宙！　マミさん流星拳だ!!』

「ティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロ
　ティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロ
　ティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロ
　ティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロ
　ティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロ

ティロ……、フィナーレッ!!（物理）」
セブンセンシズに目覚めかねないほどの連打がついに再生能力を超え、
魔女の肉体を最微塵にまで粉砕する。
直後、まばゆいばかりの光が周囲にこぼれ、
気が付いた時、舞台はただの廃ビルへと還っていた……。
・
・
・
大きく肩で息をついて、生まれたままのマミさんがペタリとその場に座り込む。
ほどなく、喜色満面の二人組が彼女を取り囲んだ。
『やったな！　いつにもして凄い活躍だったぞ』
「いや～、カッコよかったな～、さすがアルティメットマミさん」
「ア、アルティメットマミさん……？　何それ、さやかちゃん？」
「う～んと、まあ、何となく？」
『アルティメットマミさんか……、いいかげんに付けたわりには良い名前だな。
ふふっ、新しいファンが出来たぞ、巴マ――』
「――ティロ・フィナーレッ！（物理）」

――グワラゴワガキーン!!

と、ＵＦＯマンの賞賛を遮って、場外ホームラン級のフルスイングがその顔面を捉える。
正義超人マミさんが見せた突然のヒールターンに、ピシリと空気が凍り付く。
『な、殴ったね!?　父ちゃんにもバットでぶたれた事な……』
「ティロ・フィナーレッ！（物理）」
パロディに走ろうとしたＵＦＯマンの脳天に、再び謎バットの一撃が振り下ろされる。

間一髪、避けた床先でコンクリートが砕けて宙に舞う。
本気の殺意を前に、ゴクリ、とＵＦＯマンが生唾を飲む。
巴マミはしばし俯きながら大きく息をついていたが、
その内にキッと顔を上げて、その悲しみを振り絞るようにして叫んだ。
「……ＵＦＯマンがエロを生むなら、あなたが死ぬしかないじゃないッ!?」
『ゲェーッ!? お、おお落ち着けマミさん！
きっと何かもっと他に、建設的な選択肢がある筈だ!!』
「五月蠅い！ あなたを殺して私も死ぬの!!」
『重いッ!? 重いよマミさん！』
半狂乱となって謎バットを振るう少女の凶行を、固唾を呑んで一同が見守る。
誰が止める事が出来よう。
彼女の背負ったヒーローの悲しみを理解できる者など、この世界には誰一人いないというのに。
「このォッ！ ティロ！ ティロ！ ティ……」
「――それくらいにしときなよ、こんなのと心中なんて、やめとけやめとけ」
「えっ？」
振り上げたバットを押さえつけられ、思わず振り返る。
そこにいたのは赤髪をたなびかせるポニーテールの少女――。
「あ！ さ、佐倉さ……」
「どうしてもって言うなら、私がそいつをぶっ潰してやるからさ。
そんな物騒なモンはもう下ろしなよ」
『ちょ、お前は何だと……』
「お前は黙ってろ」
『はい……』
――ただ一人だけいた、巴マミの悲しみを理解する唯一のパートナー。
魔法少女・佐倉杏子、ヒーローは遅れてやってくる。

優しい少女の手に包まれて、巴マミの中の乙女が解けて弾ける。
「うぅ……、さ、佐倉さぁん！」
「おいおい、何も泣かなくたっていいだろ？
帰ろうぜ、服、とって来てやるからさ」
「うん……、うん……！」
「……遅くなってゴメンな、マミ。
ほれ、うんまい棒、食うかい？」
「もぎゅ！　うう、あいがとう、ひゃくらひゃん……」
巴マミが、ひしりとその身を寄せれば、佐倉杏子が、その髪を撫ぜる。
確かな温もりが、二人の少女を包み込む。
「ああ、えっと、その……まどか？」
「うん、なんか私たち、お邪魔、かなって……」
――そして、温もりから取り残された少女たちは、ただ茫然とその場に戸惑うしかなかった。
（……この世界は、やはり私の歩んできた時間との差異が大きすぎる）
集団から一歩離れた場所で、暁美ほむらが冷静に考察を続ける。
（けれど、それでもこの世界は……）
ちらりと周囲を見渡す。
未だ平凡な女子中学生活を継続している、鹿目まどかに美樹さやか。
既に良好な関係を構築しつつある、佐倉杏子に巴マミ。
そして、そして何より――。
（巴マミにまとわりついているあの生物、それにあの【合体】
今までの経験則から行けば、考えられる事では無いのだけれど……、
けれど恐らく、この時間軸の巴マミは、魔法少女とは違う存在となっている）
巴マミが【魔法少女】ではない世界。
想像だにしなかった世界との遭遇に、とくん、と少女の心音が跳ねる。

その事実はなぜならば、彼女の人生をクソゲーたらしめていた前提の崩壊を意味するのだから。
ゆえに願ってしまう。
永らく忘れて久しかった、その希望を。
（この、混沌とした未知の世界で……、
私は失った時間の全てを、取り戻す事が出来るかもしれない）
・
・
・
「ねえまどか、もう私たちの出番ってないんじゃない？」
「えっ、嘘!?」

三話「世界でいちばん強くなるしかないじゃない！」

【緊急企画!!　あなたの隣のマミさんを探せ！】
「テレビをご覧の皆さん！
皆さんは今、見滝原で話題沸騰中の巨大アイドル、
【アルティメットマミさん】をご存知でしょうか？」
「ただの夢、ただの都市伝説と侮るなかれ！
番組には見滝原在住の視聴者の方々から、
連日山のような目撃証言が届けられているのです！」
「それではまずは、マミさんに遭遇したと言う人々のインタビューをご覧ください」

～　街頭インタビュー【アルティメット☆マミさんを見た!?】　～
「――ええ、そうです、あまり前後の記憶がないんですが、
私、廃ビルの屋上から落ちてしまった事があって……、
その時に彼女が、そう……、巨大な胸で受け止めてくれたんです！
同僚たちはみんな夢だって笑うんですけど、
ああ、あの柔らかな感触は絶対に夢なんかじゃありません！」
（会社員・2
5歳　女性）
「いや～、全く驚いちゃったよ。
巨大な女の子がどんどんヌードになっていったと思ったら次の瞬間、鉄拳制裁だよ！
そう『こんな魔女、修正してやる！』……って感じでさ。
いや～、あの時ばかりは僕も、女性の持つ芯の強さを見直しちゃったよね」
（P・N
ショウさん・ホスト）
「最初は夢だと思おうとしたんだけどね……。
けど、見滝原だけの救世主ってのもロマンがある話じゃない。
私も商売柄、町内会から町おこしの企画を頼まれたりするんだけ

ど、

彼女の人気を活かして、何か一発興せないかな〜、とか、ちょっと不純な事も考えたりしてね……」

（実業家・3?歳　女性）

「UFOマン子？　冗談じゃない！

あの人の名前はマミさん、見滝原の守護神・アルティメットマミさんだよ！

そう私が名付けたんだから、間違いないっしょ！」

（見滝原中学2年・美樹さやかさん）

「どたぷ〜んっすよ！　どたぷ〜ん!!

こーんな巨大なお尻で怪獣を一発ノックアウトっすよ！

あんな強烈なヒップドロップは初めて見たっす！

次回のコミッケの主役はアルティメットマミさんで決まりっすね！」

（二子山学園高校2年・T．Mさん）

「――アルティメットマミさんは、きっと実在します。

今はまだ、曖昧な目撃情報しかない現状ですが、けれどいつか、彼女の正体を必ずつかんで見せます！

この二子山学園高校報道部、諸星ま――」

（二子山学園高校3年・M．Mさん）

〜〜〜

「いかがでしたでしょうか？

アルティメットマミさんは、すでにこの見滝原を象徴するヒロインとなりつつあるようです。

お膝元の見滝原商店街では、マミさんステッカーやマミさん掛け軸、

マミさんペンシルにマミさんソーセージと言ったキャラクター展

開も始まっております。
怪獣研究家あらため超常現象研究家の岡村さん、
この辺りのマミさん人気についてどう思われますか？」
「だれか今、ブタさんの事マミって言った!?」
「誰もそんな事言ってません！
とにかく！　番組ではこれからも引き続き、
彼女の情報を追いかけていきたいと思います」
「新コーナー、あなたの隣のマミさんを探せ！
アルティメットマミさんは、あなたの隣にいるのかもしれません!!」
・
・
・
・
「思いっきり浸透しちゃってるじゃないッ!?
この国のテレビ局はどうなってるのよ!?」
ダンッ、と激情のままに巴マミがテーブルを叩き付ける。
ティーカップが激しく揺れ、マミハウスに集結した三人がビクリと肩を震わせる。
「お！　落ち着いて下さいマミさん！
まだ都市伝説とかそう言うレベルの噂話に過ぎませんから……」
『そうだな～、どうせ浸透するなら、
ＵＦＯマン子の方がインパクトがあって良かったかもな～。
……ぁ、オイシ、今日のモンブランはいつにも増してウマいな。
巴マミ、君はいいお嫁さんになれるぞ』
「え～っ？　何言ってんのさ、絶対アルティメットマミさんの方が良いって……、
ってホント美味しい！　まるでプロみたいだよマミさん！」
「うぅ……、ひ、他人事だと思ってぇ～。
……でも、褒めてくれて嬉しいわ」
くすん、と鼻を鳴らして、巴マミが力なくテーブルに突っ伏す。
「ああ、私はもうお終いよ。

こんな事いつまでも続けてたら、いずれは顔バレ名前バレして、
世の男子生徒たちの格好のオカズにされてしまうんだわ」
「マミさん……」
メソメソとすすり泣きを始めたポンコツ先輩を前に、
少女たちはしばし、互いに顔を見合わせていたが、
その内にどちらからともなく頷いて、静かに口を開いた。
「あの、マミさん、聞いて下さい。
実はあの戦いの後、私たちの前にもキュゥべえが現れたんです」
「えっ？　キ、キュゥべえが？」
「いやあ、何かさ、私たちにもあの杏子や転校生に負けない資質がある
んだって」
「それで考えたんです。
私たちが魔法少女になって、マミさんの代わりに魔女と戦えば
……」
「……それはダメよ、二人とも」
珍しく強い拒絶の色を露わにして、巴マミがすっくと立ち上がる。
「あなたたち、自分が何を言っているか分かっているの？
軽々しく戦いの世界に首を突っ込む事が何をもたらすのか、
今の私の有様を見ても理解できないかしら？」
「え？　で、でも魔法少女の契約は、願い事と引き換えに得られる力、
ですし、
マミさんの変身と違って、何か特別なリスクを背負うワケじゃ
……」
「そんな甘い言葉に耳を貸してはダメよ！
無償で強大な力を得られるなんて、そんな都合の良い話があるワケ
ないわ。
それにもし、あなたたちに万一の事があった時、
私はあなたの親御さんたちに、どんな説明をすれば良いのかしら
？」
『おお！　立派な事を言うようになったな、マミ。
おいちゃんは今、モーレツに感動しているぞ！』

「……いやいやいや、アンタも反省しろよ反省」
「でも、それじゃあマミさんが……」
「いいえ、気持ちだけ受け取っておくわ、鹿目さん」
ほう、と一つ寂しげにマミがため息をつく。
「ＵＦＯマンと出会わなければ、私たち親子はずっと前に交通事故で死んでいたの。
あなたたちとお友達になって、こうして一緒にお茶をする事もなかった。
本当に彼はスケベでクズでいい加減な人だけれども、
それでも私は、彼と出会えた事を感謝しているのよ……」
『マ、マミ、君って娘は……！』
「だから、どんなに悲しい事ばかりでも、
私は彼の果たすべき使命を引き継がねばならないの、
そう、これは彼のヒーローとしての宿命を背負った私の――」
「ブッ！」
『『――!?』』
突如として紅茶を吹き出した迂闊なさやかちゃんに、たちまち一同の視点が集まる。
「さ、さやかちゃん!?　今のは酷いよ！」
『笑ったね！　ウチのマミさんの悲しみを嘲笑ったね!?』
「アワワ！　ち、違うんだよ、みんな……、
ゴメンなさいマミさん！　私、そんなつもりじゃ……！」
「いいえ、いいの……、いいのよ美樹さん……」
ふくよかな体を小刻みに震わしながら、かろうじてマミさんが口を開く。
「む、無理もない話だわ……。
変身のたびにすっぽんぽんになるのがヒーローの背負った悲哀だなんて、
石ノ森先生でも加速付けてキックするレベルの失言だもの」
「マ、マミさん……」
「け、けれど、だからこそ私は、この悲しみをあなたたちに知ってほし

くない。
あなたたちには普通の女の子としての生活を続けてほしいの、だから……！」
ダッ、と一滴の悲しみを残し、マミさんが踵を返す。
「お願い！　もうこれ以上、私たちの戦いには関わらないでぇ～ッ!!」
「ああッ!?　待って、マミさーん!!」
『クソッ！　やってくれたな、さやかちゃん!!
これだから青い子はＭ．Ｏ．Ｅが足りんと言うのだ！』
「な、なんだとォ～！　何言ってんのか分かんないけど、
今、私の事すっごいバカにしただろォ!?」
『うっさいバーカバーカバーカ！　お前ってホント馬鹿!!』
「バカじゃないもん！　バカって言う方がバカなんだ～!!」
「もう！　やめなよ二人とも！
……あ、す、すいませんお邪魔しまし、えっ、お、お土産だなんてそんなっ!?」
ご家族の方の手厚い歓迎を振り切って、一同が風なったマミさんの後を追う。
無人となった室内には、食べかけのケーキと冷めた紅茶だけが残された……。
・
・
・
『――と、まあ、マミさんの体を張った演技のおかげで、
さすがの彼女たちもドン引きだった。
当分は契約しようとか、バカな事を考える余裕はないだろう』
「ドン引きだった……じゃねぇよ！
お前、またマミの事を泣かせやがったな!?」
『な、殴ったね!?　親父にもぶた……』
「茶番はヨソでやって頂戴」
――翌日、ＵＦＯマン　ｉｎ　ほむホーム。

見滝原市最大の魔女対策拠点である暁美さん家には現在、
佐倉杏子、巴マミと言った、現状考えられる魔女退治の最高エキスパート達が集結し、
今後の身の振り方について話し合っていた。
館の主・暁美ほむらが、眼前で繰り広げられる漫才の数々を興味深げに見つめる。
（――これまで繰り返してきた時間の中でも、ここまで巴マミが弱かった世界、
いえ、自身の弱さを他者に曝け出していた世界は存在しなかった……）
漆黒のその瞳が、この世界における異物、ＵＦＯマンの姿を改めて捉える。
（魔法少女の概念とは別個の能力……、けれどそれだけではない。
自身の弱さを他者に依存する事によって、皮肉にもこの世界の巴マミは、
他の時間軸での高潔であろうとした彼女よりも、遥かに精神的に安定している。
そして、そんな彼女の一面を引き出しのもアイツ……）
「――で？　アンタ、暁美ほむらっつったっけ？
私らをわざわざこんな所まで呼び出して、一体何の話をしようってのさ？」
あけすけな杏子の声に促され、ほむらが思考を現実へと戻す。
カチャリ、と手にしたティーカップを一旦下ろすと、おもむろに口を開いた。
「おそらくは二週間後、
この見滝原に【ワルプルギスの夜】が出現する可能性が高いと思われるわ」
「!?」
「今回に限っては、私の統計がどこまで役に立つかは分からないのだけれど、
それでも対策は必要でしょう？」

「……成程ね、確かにそんなモンにこういらを好き勝手されたんじゃ、
私としても虫の好かない話だけどね……」
「あの……、ワルプルギスの夜って言うのは、何なのかしら？」
戸惑いの声を上げるマミに対し、視線はあくまで手にした三食団子に向けたまま、杏子が答える。
「魔法少女たちの間で語り草になってる、それこそ都市伝説みたいなモンさ。
複数の魔女の集合体だの、一夜にして町一つを吹き飛ばしただの、
トンデモない噂話ばかりが先行してる怪物だよ」
「補足するならば、他の魔女と異なり固有の結界を持たず、
呪いを直接的な物理現象として振り撒く規格外の魔女よ。
一たび奴が現れたならば、この見滝原も壊滅的な打撃を受ける事となる……」
「……もっとも私としては、そんな化物が現れると言う予言自体、
イマイチ信じられないワケなんだけど？」
言いながら杏子が大口を開け、団子の一つを豪快に放り込む。
そこはかとない緊張感に、マミはしばしオタオタと両者を見比べていたが、
その内にふっ、と胸中に沸いた疑問を口にした。
「あら？　けれど暁美さん、
それならばあなたは何故、鹿目さんたちが魔法少女になる事を拒むの？
確かに魔法少女にはリスクも多いんでしょうけど、
今は一人でも多くの戦力が欲しい時なのではないかしら？」
ピクリ、とほむらの指先が微かに震える。
鉄面皮の少女が始めて見せたわずかばかりの動揺に、三人の目が丸くなる。
ほむらは一瞬、瞳を閉じ、やがてより深刻な色を宿して口を開いた。
「――あなたたちに全てを話すわ、現在の私が持つ情報の全てを。
これからの戦いの前に、あなたたちには絶対に知っておいてもらわねばならない話だから、

けれど……」
じっ、と光宿らぬ漆黒の瞳がマミを捉える。
「けれど、相当に深刻な話になる、心の準備だけはして頂戴。
特に巴マミ、かつて私が辿った世界において、
あなたが真実に耐えられた事は一度たりとも無かったわ」
「え……、それって、どう言う？」
「おい！　まどろっこしいのは抜きにしようぜ」
「……長い話になるわ。
これから話すのは、私がこの見滝原で知った、魔法少女の真実――」
・
・
・
――そうして、暁美ほむらは訥々と語り始めた。
自分が、ワルプルギスの夜との戦いで命を落とした鹿目まどかとの出会いをやり直すために、
限定的に時間に干渉出来る能力を得た魔法少女である事。
巻き戻した世界の中で、ソウルジェムの穢れ切った魔法少女が、
魔女へと転化する様を目の当たりにした事。
それこそがまさにキュゥべえ……【インキュベーダー】の狙いであり、
少女の希望が絶望に転化した際に生み出される膨大なエネルギーを回収するべく、
無害な生物を装って人類との契約を続けている事。
そして、魔法少女の中でも群を抜いた素質を持つ、
鹿目まどかが魔女となってしまった場合、
その呪いは惑星一つを滅ぼすほどの災厄をもたらしてしまう事……。
――語るべきは全て語られ、物語は現在へと戻る。
「……私の目的は、鹿目まどかが魔法少女になるのを阻止する事。
一旦魔法少女となってしまえば、遅かれ早かれ、彼女が魔女と化す

事は避けられない。
けれど、誰かがワルプルギスの夜を止められなければ、
彼女はこの町を守るために、自ら魔法少女となる道を選ぶでしょう。
故にワルプルギスの夜とは、絶対に私たちだけで決着をつけなければならない」
全ての言葉を吐き出し、ふうっとほむらが大きく息を吐く。
相も変わらず感情の起伏の少ない少女ではあるが、額に滲んだ汗が、その疲労を大きく物語る。
杏子も、マミも、ＵＦＯマンも一言も発しない。
静寂に満ちた室内で、三者は三様にほむらの言葉の意味を反芻していた。
どれほどの時間が流れただろうか。
やがて、おもむろに杏子が口を開いた。
「それを全部、私たちに信じろって言うのかい？」
「佐倉さん……」
「暁美ほむら、アンタの話、確かに筋としては通っているのかもしれない。
けどそれにしたって突拍子が無いように聞こえるよ。
たった一人の人間が、地球を滅ぼしちまうだなんて、そんな――」
『いや、私は信じよう』
杏子の言葉を遮って、珍しく深刻な面持ちでＵＦＯマンが語る。
『人間の持つ不確かな感情の奔流の中には、時にそう言った条理を逸したエネルギーが宿る。
君たちのような揺らぎ易い年頃の少女たちには、特に。
そしてこの広大な宇宙の中には、
その種のエネルギーを喰い物にする生物が確かに存在するのだ』
「……ＵＦＯマンはそう言った生物から人類を守るため、地球にやって来た、だったわね？」
『ああ、とは言え、
人類と接触して特定の感情を引き出す生命体などと言うのは、さす

がの私も初耳だがな。
インキュベーダーめ、
甘言を弄してピュアーな少女たちの祈りを弄ぶ卑劣な行い、このＵＦＯマン仮面が許さん』
キザに闘志を燃やす宇宙人を横目に、杏子が一つ溜息をつく。
「……二週間後にワルプルギスの夜がやってくる、そいつは信用できる情報なのかい？」
「今度ばかりは、私にも確証が持てないわ。
さっきも語った通り、この世界はこれまでに比べて、イレギュラーが多すぎる。
けれど、こちらにもワルプルギスの夜が存在すると言うのならば、きっと物語は同じ所に辿り着く」
「……ワルプルギスの夜が来て、それで、それでどうするの？
魔女を、その娘を殺す、の？」
力無くこぼれた巴マミの声色に、シン、と室内が静寂に満ちる。
「ご、ごめんなさい……、こんな事、言っちゃいけないって、思っちゃいけないって分かっているの……、分かって、分かっているの……に……」
「マミ……」
言葉は途切れ、少女の悲しみはボロボロと大粒の涙に変わる。
慰めようと伸ばしかけた杏子の手が、しかしまるで呪いのようにピタリと凍りつく。
佐倉杏子は決断している。
魔女の出自がどうであれ、自分の行く末がどうであれ、彼女は魔女を狩り続ける。
狩り続けた過去を後悔する事もない。
無垢な少女に掛けられる言葉も、あろうはずも無い。
「一度、魔女となってしまった者を、再び人間に戻す術なんて無い。
あなたが罪の意識を感じる必要なんてないわ」
冷然と、突き離すようにほむらが言う。
「それがどんなに不当な取引であったとしても、彼女たちはとうの昔

に対価を得ている。
その末路について、あなたが同情する謂れはない」
「暁美さん、だけど……」
「魔法少女は止まれないわ。
一度歩みを止めたが最後、たちまちにそのソウルジェムは濁り、
今度は私たちが、世界に呪いを振り撒く魔女と化してしまう」
「……」
「魔女は、魔法少女が決着をつけるべき存在。
巴マミ、魔法少女の理から外れているあなたに対し、
私から掛けられる言葉は無いし、戦いを強いる事も出来ない」
けれど、と言葉を切って、ほむらがマミに向き直る。
「都合の良いお願いではあるけれど、もしもあなたに、
かつての魔法少女であった巴マミのように、この町の人々を守ろう
と思う意志があるならば、
その時は私たちに、どうか力を貸して頂戴」
そう言って、ほむらが深々と頭を下げる。
そして室内には、再び静寂が戻った。
・
・
・
――夕刻。
オレンジに染まる自室にて、巴マミはベッドに突っ伏して、
まるで背景の一部でもあるかのように、枕に顔を埋めていた。
『マミ、部屋に入るじょ』
ややためらいがちに、おずおずとＵＦＯマンが枕元に寄り添う。
いつものお気楽な軽口も、この時ばかりは力とならない。
『なあマミ、眠ってしまったのかい？』
「……いいえ」
力無く、かろうじてマミが横顔を向ける。
泣き晴らしやつれた少女の瞳が、珍しく渋い顔のマスコットを捉え
る。

『すまなかったな』
「なぜ……、あなたが謝るの？」
『……いや』
「ねえ、ＵＦＯマン、あなたは魔女と魔法少女の関係に気が付いていたの？」
『いいや、
だが、うすうす悪い予感だけは感じていたよ。
外来種でもなければ人類の技術で生み出された訳でもない未知の生命体。
ただひたすらに人類を呪うと言う、彼女たちの性質が、
果たして何処から来たモノなのか、とな』
「そう……」
それからしばし、マミは口を閉ざしてそっぽを向いた。
静寂の中、時計の針の音だけが時間の流れを告げる。
その内にふっと、脳裏に沸いたとりとめの無い考えを口にした。
「……暁美さんは、他の時間軸では私も魔法少女だったと言っていたわ。
もしもあなたと出会わなければ、
私も今頃は、キュゥべえと契約をしていたのかしら？」
『――私がこの星に来たばかりの頃、とある交通事故の現場に出くわした。
痛ましい、けれどもこの星ではよくある事故の一つとして、私は非介入を決め込もうとした。
その時、凄惨な事故現場に駆け寄ろうとする、奇妙な珍獣の姿が私の目に止まった。
不吉なモノを感じた私は現場に急行し、
その生物と、事切れる直前の女の子とのコンタクトを阻止する事に決めた……』
「それが、あの日に起きた出来事……？」
『そうだな。
今の君を苦しめている運命、それは本来、私が背負わねばならな

かった物だ。
私がさっき君に謝ったのは、つまりはそう言う事なのだ』
「けれどそれなら、それならどうしてあなたは、私たち家族を助けたりしたの？」
悲痛な声を振り絞り、巴マミが上半身を起こす。
「だってそうでしょう？
あなたに本来の力さえあれば、魔女退治も私なんかよりずっとうまくやれてた。
ワルプルギスの夜だって簡単に倒せていた、それなのに……！」
『それは……、どうだろうな？
ほむら君の話によれば、随分と強力な魔女のようだが』
「馬鹿よＵＦＯマン、
私の命なんて、この見滝原とは釣り合わないわ。
自分のしなければならない事を分かっているのに、
今だってこうして、暁美さんや佐倉さん、それにあなたを苦しめている」
『マミ……』
熱いしずくが二つ、丸っこい銀色の頭部で跳ねる。
少女が落ち着くのを待って、ＵＦＯマンは再び口を開いた。
『……きっと、その時の私は、チャンスは平等であるべきだと考えていたんだ』
「チャンス？」
『ほむら君は不当な取引と称していたが、あの時の君にはその代償として、
魔法少女としての生を拾うチャンスがあった、
そして、私がそれを奪った。
だから私は、それに相応しいだけの対価を君に払わねば気が済まなかったのだ』
「……」
『ああ、だがそれもただの建前だな。
そんなへ理屈よりも、私にはもっとシンプルな理由があった。

なぜならば、私は――』
「私は……？」
『――私は、地球の女の子が大好きだからな。
君みたいなチャーミングな女の子とお知り合いになれる機会を、
みすみす見逃したりするものか、なっ☆』
「……　……　……え？」
きょとんと、マミが両眼をぱちくりさせる。
やがてそれが、ＵＦＯマン流の心遣いとようやく気付き、
沈みかけた表情に無理やり笑みを作った。
「……もう、ダメよＵＦＯマン。
そんな言葉はこの国では、本当に特別な女性にしか言っちゃいけないんだから」
『ん～、そうかい？　でも似たようなモンだろう。
何せ今の私は君が居なけりゃ、タダのセクハラ宇宙人なんだからな』
「あら、そこは自覚があったのね」
ハハハ、と二人が空笑いを重ね合う。
『まあ、そんなワケだマミ、
君がどれほど嫌がろうが、私はいつも君と一緒に居る。
だからキミの重荷の半分、辛い事や悲しい事は私が背負おう』
「もう半分、は？」
『まどか君やさやか、君のご両親に町の人たち、それにあのほむら君や佐倉杏子も。
それは君が背負うべきだ。
私と君のアルティメットマミさんだったら、それが出来る』
「……今日は本当にどうしちゃったの？
何だかいつにも増してセリフが浮いてるわよ、ＵＦＯマン」
『フフーン、
こう見えて私も世の女性たちから「初恋ブレイカー」と呼ばれる男だからな。
どうしてもキザな言葉がサマになってしまうんだな～これが』

「えっ、誉められてるのかしら、それ？」
『ムムッ、立派な事を言い過ぎたせいか、お腹の方がエネルギー切れだ。
マミ、食事にしよう。
毎日モリモリ食べなきゃ、女の子はおっきくなれないぞ』
「……それ、私が気にしてるのを知ってて言ってる？」
『何を言うか、女の子は多少ムッチムチなくらいが魅力的なんだ。
体重が増えれば、それだけで単純に攻撃力も上がるしな！』
「もう、セクハラよＵＦＯマン。
そんな事、私以外の女の子に言っちゃいけないんだからね」
むっつりと口を尖らせながら、それでも幾分、安堵の表情を浮かべて、
巴マミはゆっくりとベットから起き上がった。
・
・
・
――明朝、見滝原市内、児童公園。
未だ気忙しい老人も訪れぬ薄闇の中、その刻限には似つかわしくない少女が二人、
夜明けの時をただ静かに待ちわびていた。
「……このタイミングであなた達に真実を伝える事は、
私にとっても一つの賭けだった」
ポツリ、と黒髪の少女がこぼす。
赤髪のポニーテールは応えず、立ち漕ぎで軽くブランコを揺らす。
「ただ一つ、土壇場で彼女が真実を知り、心を折られてしまう事、
それだけはどうしても避けなければならなかった。
連携が崩れればワルプルギスの夜には勝てない、
そして情報の使い所を知るインキュベーダーは、必ずその手を打ってくる」
「……」
「彼女を切るしかないのであれば、まだ傷の浅い今の方がいい。

この前言った通り、魔女は魔法少女が倒すべき存在、
ワルプルギスの夜とは、私とあなた、二人で戦うわ」
「舐めんなよ、暁美ほむら」
言いながら反動をつけ、杏子がブランコから飛び降りる。
「アンタが何人の巴マミを見てきたのか知んないけどさ、私のツレは――」
言いかけた言葉をふっと止め、逆光に目を細める。
様子に気づいたほむらもまた、視線を東へと向ける。
朝焼けに煙る街並みを、一人の少女が駆け抜けて来る。
学校指定の真っ赤なジャージに、ピッチに合わせて揺れる金色のカール。
「見滝原中・3―B」と縫い込まれた豊かな胸が、呼吸と共に大きく弾む。
巴マミがやってくる。
見滝原最強のヒロイン、アルティメットマミさんがやってくる。
『エイドリアアアア――ン!!』
「ちょっと!? 近所迷惑よUFOマン! しかも微妙に間違ってるし!」
謎眼帯でコスプレしたUFOが突如としてコントを始め、
たちまちに早朝の爽やかな空気をぶち壊しにする。
「……なっ?」
唖えたポッキーを男岩鬼のようにクイッと立ち上げ、
佐倉杏子が会心のドヤ顔を向ける。
暁美ほむらは一つ溜息を吐くと、
それでも気持ち表情を柔らかくして杏子の後を追った。
・
・
・
『タキシードパワー! メイクアップ!』
「魔法少女にかわって、おしおきするわよ!」
壮麗なるマミさんのテーマが響き渡る中、歪んだ映像の世界に乙女

が足を踏み入れる。
ちらり、と足元を見れば、見上げる二人の魔法少女が頷き合う。
「巴マミ、打ち合わせの通りに行くわ」
「焦るなよマミ！　アンタの道は私らで開く」
二人の声にマミが静かに頷く。
その脳裏に、ワルプルギス打倒会議での一幕がありありと甦る。
ただ魔女を倒すのが目的ではない、
限られた時間の中で、強大なる魔女を屠る必殺の方程式を導き出すのだ、と。

『――ここから先の二週間、私と佐倉杏子は戦闘のサポートに徹する。
魔女退治のアタッカーは巴マミ、あなたに務めてもらうわ』
『おい、正気かよ！　マミ一人に汚れ仕事を任せようってのか？』
『いや、私もほむら君に賛成だ。
今のアルティメットマミさんには、必殺の呼吸を掴むための場数が必要。
何より、君たちが消耗を抑えてグリーフシードの回収に努める事こそが、
確実に明日の勝利に繋がるのだから』
『ぐっ……』
『そして本番においても、私たちの役目は変わらない。
私たちの魔法はサポート、本命はあくまであなたのＭ・Ｏ・Ｅ・
あのワルプルギスの夜の巨体を屠るには、
どうしてもアルティメットマミさんの力が必要になる。
巴マミ、あなたの持つ超人の底力、私たちに見せて頂戴――』

「――来るわよ、巴マミ！」
「タァァァァー……」
束の間の思考を振り切って、一直線にマミさんが駆ける。

歪なる映像の世界に右手を伸ばし、髪の毛を掴んで一気に引き摺り出す。

「ティロ・フィナーレッ!!(物理)」
マミが絞める!!
魔女の長髪を利して、複雑怪奇に対主を絡め獲るッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × ハコの魔女】
決まり手：ティロ・フィナーレ(超人絞殺刑)

「ティロ・フィナーレッ!!(物理)」
マミが極める!!
中空で激しくもつれ合いながらも、巨大な腕躯が子羊に十字を切るッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × 委員長の魔女】
決まり手：ティロ・フィナーレ(腕ひしぎ逆十字固め)

「ティロ・フィナーレッ!!(物理)」
マミが捕える!!
もっさりとしたアフロを根元からロックし、荒々しくも大地に擦り合わせるッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × 犬の魔女】
決まり手：ティロ・フィナーレ(ブルドッキング・ヘッドロック)

「ティロ・フィナーレッ!!(物理)」

マミが跳ぶ!!
捻りを加えながら上空に舞い、暗黒を払う一条の星屑となるッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × 暗闇の魔女 】
決まり手：ティロ・フィナーレ（シューティング・スター・プレス）

「ティロオォロォロォロオオォォォォ――――ッ!!」
マミが吠える!!
乙女の絶叫が魂震わすアートとなって凱旋門を砕くッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × 芸術家の魔女 】
決まり手：ティロ・フィナーレ（アパッチのおたけび）

「ティロ・フィナーレッ!!（物理）」
マミが担ぐ!!
交差した両腕が竜巻を呼び、厳寒の日本海へ向けてブリッジを描くッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × 落書きの魔女 】
決まり手：ティロ・フィナーレ
（ジャパニーズ・オーシャン・サイクロン・スープレックス・ホールド）

「ティロ・フィナーレッ!!（物理）」
マミが疾る!!
モノクロームの世界を切り裂いて、踏み出した脚が閃光を生むッ!!
【アルティメットマミさん ○ ― × 影の魔女 】
決まり手：ティロ・フィナーレ（シャイニング・ウィザード）

「ティロ……、フィナーレエエエエ――――ッ!!（物理）」
マミが投げる!!
捻じりを加えながらなお遠心力を増して、遥かなる虚空目がけて思い切り解き放つッ!!
【アルティメットマミさん　○　―　×　鳥かごの魔女】
決まり手：ティロ・フィナーレ（大雪山おろし）

・
・
・

猛き情熱を胸に、戦いの時は光陰の如く過ぎ去って……。

――二週間後、見滝原市某所　天候：スーパーセル

舞台劇の幕開けの時は、あっという間に訪れる。
荒れ狂う黒雲を前に、川べりには戦いに臨む三人の少女と、一人の異星人の姿があった。
「――まるで奇跡ね。
これだけのイレギュラーに遭遇しながら、アイツの襲来の時だけは同じ。
確実にツキは私たちにあるわ」
「へっ、奇跡なんてえのは、そんなに安っぽいモンじゃねえっつうの!」
相も変わらず突き放すようなほむらの言葉に、
やはり杏子が軽妙な軽口で応じる。
ふるっ、とボロボロのマントからはみ出したマミの右手が、微かに震える。
「大丈夫だよ、マミ」

そっと、杏子が左手を添える。
絡めた指先から伝わる温もりが少女を救う。
「あれだけの修行を重ねてきたんだ。
これでアイツを倒せなきゃ嘘っぱちさ」
「杏子……、ええ、そうね」
「――かつて、私が歩んできた道程の中で、
幾人かの【巴マミ】が、この舞台まで辿り着いたわ」
ゆっくりと、暁美ほむらが振り返る。
「けれどマミさん、私は今日ほど、あなたの存在を頼もしいと感じた事は無かった」
「……」
「あなた達とだったら、きっと、この先の未来を描く事が出来る」
「ありがとう暁美さん、けれどそれは、きっと私一人の力では無いわ」
そっと、マミが左手を自身の胸に当て、これまでの日々を振り返る。
（杏子がいる……、暁美さんがいる……。
鹿目さんも、美樹さんも、お父さんもお母さんも、私の帰る場所を用意してくれている……）
（そして……）
『見えるか、マミ！　あの黒雲の彼方に輝く巨人の星がッ！』
「ええ、もちろん！　けれど今日の私は一介の狩人（イェーガー）よッ!!」

――潔く、脱ぎ捨てる、裸になる。

地上に咲く大輪の花となった巴マミが、天空を仰ぐようにその指先を勇おしへと伸ばす――。

『ＵＦＯマン、アルティメットマミさん、イキまァ――――――――す!!』
「私はもう、何も怖くないッ！」
壮麗なるマミさんのテーマが流れる中、
降り注ぐＵＦＯマンの熱情を一身に浴びて、少女の中の激しい乙女が華開く。

たわわなる二つの果実が、まん丸のお尻が、もっちもちの太ももが漲る想いと共に膨らみ、
金色の輝きへと包まれていく。
荒天を弾き返さんばかりの勢いで大地をズン！　と踏みしめて、
一個の超人と化した乙女が天空を睨み付ける。
「アルティメットマミさん、見参ッ!!」
『イクぞマミッ！　俺たちの戦いはこれからだッ!!』

「終わらないわッ!?　物語はもうちょっとだけ続くわよッ!!」
『フフ……、　シリアスな　流れムシして　お約束　　アデュー！』

待

て、次回!!

四話「女子力が息してないじゃない！」

十六日未明、突如として発生した異常気象を前にして、
見滝原市は近隣住民に対し避難勧告を発令した。
避難先となった体育館に多くの人々が身を寄せ合う中、
少女は一人廊下の途中で、窓ガラスを激しく叩く嵐を見つめていた。
「マミさん……、みんな……」
ポツリとその少女――、鹿目まどかの口から、心細げに吐息が漏れる。
どこにでもいる中学二年生、普通の女の子に過ぎない彼女だが、
それでも彼女は知っているのだ。
気象庁ですら予測のつかなかった天変地異の前触れが、
世を呪う魔女と魔法少女たちの戦いの幕開けである事を――。
「彼女たちの事が心配かい、まどか？」
「えっ？」
久方ぶりに耳にしたその声色に、ぞわり、とまどかの首筋が泡立つ。
おそるおそる振り返れば、少女の視線の先には。
「……キュゥべえ」
その名を呼ばれる事を喜ぶかのように、真っ白な尾が緩やかに震える。
キュゥべえ――【インキュベーダー】
魔法少女の生産と放牧を生業とする、四足の畜産業者。
人見知りの女の子を扱うかのように、出会った頃のままの笑顔で悪魔が微笑む。
「そう警戒しなくたっていいよ、まどか。
これまでも僕は、魔法少女と言うシステムが生み出す功利について言葉を尽くしてきた。
その上でなお、優先されるのは君自身の意志だ。
きみが魔法少女になる事を望まぬ以上、こちらも強いて干渉を続け

るつもりはないよ」
「けれど、それならどうして、今更になって私の前に現れたの？」
「それは勿論、僕の力が必要になるかもしれないと思ったからさ。
もしかしたら今日、君が心変わりをして、魔法少女の力を必要とするんじゃないかってね」
言いながらキュゥべえが欄干に飛び乗り、
まどかと肩を並べる形で窓の外の惨事を見つめる。
「頭の良い君なら、ここまで話せば僕の意図は分かると思うけど……？」
「……」
「そう、彼女たちは負けるよ、このままだと確実に。
敗因は計画段階での単純な見落とし。
感情と言う現象に対して、僕よりも遥かに知悉しているはずの彼女たちなのに、
どうしてこんな致命的なミスに誰も気が付かなかったのか？
君たち人類の思考は、とてもじゃないが理解できないよ……」
・
・
・
開演の時刻がやってくる。
カトリーナとキャサリンが同時にやってきたかのような荒天の中、
異形のパレード達が行進を始め、かつて少女であった者たちの歓声が響き渡る。
二人の魔法少女と一人の超人が天空を見上げる。
渦巻く瘴気のカウントダウンが始まり、そして――。
「先行する」
ポツリ、と暁美ほむらが呟く。
刹那、開幕を告げるハズの魔女の哄笑をキャンセルして、
対戦車ロケット砲の一人一斉射撃が直撃する。
爆風で流された巨体の先に、これまた狙い澄ましたかのように迫撃砲の援護が火を吹いて、

ドワォズワォと天空を灼熱で染め上げる。
「こ、これがサポート……？
暁美さん、第三次大戦でも始めるつもりなの？」
『あ……、ありのままに起こった事を話すじょ。
魔法少女のお手並みを拝見するつもりが、気が付いたらコマンドーを見ていた！
ポルナレフ状態だとかヤムチャ視点だとか言うレベルじゃない、もっと恐ろ――』
「問題ない。
原作のファンにとっては、いつもの見慣れた光景よ」
わざわざメタい事を言う為だけにテレポートして戻って来たほむらさんが、
しかし次の瞬間には、遥か彼方の川底から秘密兵器と共にせり上がってくる。
時を駆ける魔法少女の放つ渾身の地対艦ミサイルがドテっ腹に直撃し、
とっておきのダメ押しトマホークともども爆裂する。
圧倒的な近代兵器の実力が、古の魔女を吹っ飛ばし、そして……！
「よっしゃあァッ!!」
飛んだ先には穴ッ!!
何故かたまたま掘ってあった、
魔女の体がまるごとすっぽり収まるような、悪戯を超えた超落とし穴。
底深い穴の底で、まるでわんぱく少年のように杏子が大槍を振り回す。
「ドンピシャじゃねえかっ！　こっからは私が仕切らせてもらうよ」
爆薬数十トンよりも頼もしい魔法少女、佐倉杏子が威勢良く啖呵を切る。
振り回す豪槍が幾段にも分離して、坑道の外周より螺旋を描いて魔女を襲う。
坤の一節一節より枝分かれした数多の穂先が、鉤爪のように魔女の

全身に喰らいつき、
その全身を縛り上げながら、捻じれた一本の巨木のように力を収束させていく。
この段になっても、魔女は勘触りな高笑いを止めようとしない。
「ニヤついてんじゃねえェ――――ッ!!」
激昂のままに杏子が石突きを振りかざして大地を叩く。
直後、絡み付く棍が巨大な槍となって天を貫き、異形の巨体を逆さまに磔にする。
「準備はいいぜ！　マミ、ドテッ腹ブチ抜いてやりな!!」
『おおッ！　さすがは杏子さん、
今までロクな見せ場が無かったのがウソのような活躍ぶりじゃないか！』
「お前は私を何だと思ってたんだッ!?」
「ようし……、アルティメット、イクわよッ!!」
メイン・ストリートを一直線に、大股のストライドで乙女が駆ける。
『ホップ！』
息を弾ませ大地を踏み切り――、
「ステップ！」
交差する左足で河川を飛び越え――、
『カール・ルイスッ!!』
敢えて定石を破り、勢い良く両足で踏み抜いて乙女が跳ぶ、
前方ではなく、巨体は遥かに上空を目指して弧を描く。
目測を大きく誤った前方宙返りは、標的のはるか手前に落下する。
――かに見えた刹那、菅原文太もかくやと言う勢いでカッ飛んできたトラック・ガールが、
中空でマミさんと横一文字に交錯する！
「フィニッシュ・ムーヴよ、飛びなさい、マミ！」
『おおっ、ほむほむを踏み台に!?』
「デュワ！」
空中で幻の四段目を踏切り、鮮やかなムーンサルトで天空へと駆け上る。

遥か眼下に獲物を見据え、少女の瞳に猛禽のきらめきが宿る。
『イケる！　この高さがあれば通常の三倍の回転が狙えるぞ』
「ティロ……、フィナアアァ――――レエエエエ――――――――ッ!!
（物理）」
全身に強烈な捻じりを加えながら両足を繰り出す。
通常の巨漢レスラーの十倍に匹敵する、アルティメットマミさんの百六十文キック。
両足で勢い良く踏み出したならば、倍率ドンの三百二十文ロケット砲。
更にそこに通常の飛翔天女の二十倍の跳躍と、
通常の三十倍のスクリュースピンスライディングが加わった時、その威力は――！
１６０×２×２０×３０　＝　１９２，０００文キック!!
実に一万二千馬場力と言う驚異的なエネルギーを得て、
一条の弾丸と化した乙女が本丸へと吶喊する。
「……ッ！」
迫りくる脅威を前に、初めて魔女の哄笑が止まる。
対抗する暇も与えず、究極少女が鳩尾に深々と抉り込む。
『「い　っ　け　え　え　え　え　え　え　え――――ッ!!」』
少女と宇宙人のユニゾンが大気を震わし、魔女の全身が激しく波打つ。
その一念は万物を貫き、繰り返される舞台劇に終止符を打つかのように思われた。
――だが、
《キャァーハハハハハハッッッ!!!!》
「――!?」
再び、狂ったような嘲笑がこだまして、邪悪が鎌首をもたげて圧力を増す。
大きく弾かれたマミさんが、反動のままに川面を転がり水しぶきを上げる。

「や、破られた、の？　渾身のティロ・フィナーレが……？」
「来るぞマミ、いつまでも呆けてるんじゃねえッ!?」
「〜〜〜〜〜ッ！」
　束の間の思考を打ち破り現実へと戻ったマミの前に、
　突如、炎を纏った高層ビルが砲弾と化して突っ込んでくる。
　回避の猶予は無い。
『マ、マミッ!?』
「くううぅ〜ッ！　こ、こんなモノォ――――ッ!!」
　大きく腰を落とし、超質量を真っ向勝負で受け止める。
　勢いのままに大きく弾き飛ばされながら、それでもマミが咆哮を上げて立ち向かう。
　土俵際一杯で踏み止まると、渾身の水車投げでベクトルを上方へとハネ上げる。
　しばしの間、大きく肩で息をついた巨大乙女の背後で、大地がズン、と激しく揺れる。
　黒煙に揺らぐ視界の彼方で、磔刑を脱した魔女の高笑いが絶頂を迎える。
「……あの一撃に耐えきるなんて、
　どう言う事なの、アイツ、この戦いの中で成長したとでも言うの？」
『いや……、間違いなくヤツにもダメージはある。
　ほむら君の立てた計画も、君たち三人の連携も完璧だったと言っていい。
　過ちを犯したのは私だ。
　今のアルティメットマミさんには、敵に最後の一押しを加える決定打が欠けていたのだ』
「ＵＦＯマン……、それは、一体？」
　ピコーン、ピコーンと言う絶望的なアラームを響かせて、シンデレラの舞踏会が終わりを告げる。
　蕩けるスーツの隙間から肌色が広がり、柔らかなわがまみボディが重力に惹かれてたわわに踊る。
　その段になってようやくマミにも、自分の身を襲っている異常事態

の正体が理解できた。
「そんな……、力が、M．O．E．が溜まらない……？」
．
．
．
「M．O．E．とは、思春期の少女たちが抱く羞恥心と言った感情を
瞬間的に爆発させて生み出すエネルギー。
これは初めて彼らに出会った時、他ならぬＵＦＯマン自身が教えてくれた事だ」
一切の感情が宿らぬガラス玉の瞳を窓の外に向けて、キュゥべえが淡々と言葉を紡ぐ。
「そして羞恥心とは、
自身の醜態が他人の目に曝されていると言う自覚があって、初めて成立する感情だ。
アルティメットマミさんが本来の力を発揮するには、周囲にそれなりの観客が必要だと言える」
「一体、何を言いたいの？」
「分からないかい？
今日はその観客となるべき見滝原市民の大半が、この避難所に逃れてきてしまっている。
戦いの舞台選定の段階で、彼女たちは最悪の選択をしてしまったわけだ」
「そんな事……、け、けどこれまでだってマミさんは、
魔女の張った結界の奥で人知れず戦い続けて来た筈だわ。
そう、ほむらちゃんや佐倉さんの存在が、マミさんの力になっていたハズ……」
「羞恥心、と言う感情を紐解くのに重要なのは、
当人と対象との距離感、心の壁の存在だと僕たちは解釈している。
今の巴マミは、暁美ほむらや佐倉杏子に対し、実の家族にも等しい信頼を置いている。
けれどまどか、肉親の前で肌を晒すのを恥ずかしがる子供なんてい

るかい？」
「それは……」
「更に付け加えるならば、
巴マミが、こと戦闘に関して天才的な資質を有していたのも仇となった。
限られたエネルギーを効率よく運用し、一撃で確実に相手を仕留める。
彼女の才能は短期間の内に見違えるように開花し、結果、
M．O．E．の限界値自体が大きく減衰している事に、
誰一人として気付かないと言う異常事態に陥ってしまったんだ」
「……」
「僕の言葉なんて信用できない、かい？
でもまどか、状況が今、まさに僕の推測通りに運んでいる事は、
直接現地を見るまでもなく理解できるはずだ」
言いながら頭を振るい、窓の外を見るよう促す。
荒天はなお激しさを増し、落雷が視界を白色に染め、一足遅れの轟音が窓ガラスを震わせる。
「スーパーセルの上陸より、すでに十分近くが経過した。
通常のアルティメットマミさんなら、とっくに活動限界を迎えている頃合いだ。
それでも未だに戦闘が続いている、当初のプランは完全に崩壊している筈だよ」
「そんな……、そんなのって……」
「――さて。
鹿目まどか、今の君には、採るべき選択肢が二つある。
彼女たちの奮闘が奇跡を起こす事を信じ、ひたすらここで耐え続けるか、
それとも自ら魔法少女となって、より確実な勝利を手にしておくか？
選択権はあくまで君にある。
君自身の意志で、後悔のない道を選ぶと良い」

「私、わたし、は……」
「――まどかッ!!」
渡り廊下の角より現れた美樹さやかが、二人の姿を見咎め叫ぶ。
「キュゥべえ……、なんだって今更！　まどか、今すぐそいつから離れてッ！」
「さやかちゃん……、ゴメンね、でも、私……」
一瞬、まどかがさやかの姿を寂しげに一瞥し、しかしすぐに視線をキュゥべえに戻す。
「それじゃあ、教えてくれるね？
まどか、君は何を願って魔法少女になるんだい？」
「私の、願い、は……」
・
・
・
「きゃあああぁ――――っ!?」
伝説の魔女の暴威が乙女を襲い、その五体を容赦なくビルディングへと叩きつけられる。
崩れ落ちる瓦礫の中でついに時間は尽きて、光に包まれた少女の姿がみるみる縮み、
ついにはただの灰かぶりへと返ってしまう。
『マミッ!?　大丈夫かッ!!』
「ぐっ、まだ……、ＵＦＯマン、もう一度変身を……」
『馬鹿を言うな！　今の状態では君の体が持たん！
仮に変身できたとしても、ものの数秒も戦えるものか』
「ＵＦＯマン、だけど……！」
「そいつの言う通りだ、お前は少しそこで休んでんな」
「杏子!?」
朋友からの戦力外通告を受け、マミの眉間が悲痛に歪む。
対し、佐倉杏子はどこかバツが悪そうに笑った。
「こいつは罰さ、嫌な事も辛い事も、全部お前ひとりに押しつけちまって、

それでおいしい所だけ持って行こうだなんて、私らは虫が良すぎたんだ」
もう一度軽く自嘲して、手にしたグリーフシードを軽く放る。
パシリ、と乾いた音を立て、暁美ほむらが片手で受け止める。
「佐倉杏子の言う通りよ。
やはり魔女は、魔法少女の手で決着を付けるべき存在。
それがあるべき形に返っただけの事よ」
「暁美さん！」
マミは一瞬、ほむらが全てを諦めてしまったのかと思った。
だが違う。
浄化を終えたばかりのソウルジェムは、今や彼女の掌の上で、
これ以上に無い澄んだ輝きを放っていた。
「マミさん、私はこの世界が好き。
いくつものイレギュラーを乗り越え、ようやくみんなで辿りつけた、この世界が」
「……」
「この戦いを乗り越えた先に、どんな未来が待ち受けているのか見てみたい。
だからもう、私は時間を巻き戻したりしない。
全ての決着は、今日、この場所でつけて見せる」
「暁美さん……」
「おしゃべりは終わりだ、来るよ！」
グリーフシードを打ち捨てて、二人が戦士の顔へと戻る。
見上げた彼方の上空では、舞台劇の魔女の高笑いが最高潮を迎え――、
≪キャーハ……≫
「……えっ？」
不意に、ピタリと嬌声が止む。
いや、途切れたのは笑い声ばかりではない。
舞台劇に欠かせぬ異形のパレードも、耳をつんざく風の音も、
気が付いた時には、魔女をとりまく全ての空気が静止していた。

無論、時間停止の魔法の類でもない。
唯一それを使える暁美ほむらもまた、今は状況の変化に戸惑うばかりである。
――と、
不意に彼方の後背より、一筋の光が天空目がけて立ち上っていく。
分厚い黒雲を一直線に穿ち、薄桃色の神秘的な煌めきを周囲に拡散させる。
「これは……、なんの光!?」
「ＵＦＯマン、一体……！」
『この光、いや、あるいはまさか、裏Ｍ．Ｏ．Ｅ．……！』
暴風が光柱を軸とした竜巻へと変わり、使い魔の群れが、影の少女達が、
そしてワルプルギスの夜の巨体から噴き出した瘴気が渦となり、
光の向かう先へと螺旋を描いて吸い込まれていく。
依るべき者を失った歯車が音を立てて軋み、緩やかに大地に落下を始める。
天空に立ち上る暴風と、大地を揺らす衝撃、視界を埋め尽くす閃光――。
終末を告げるかのような猛威はいつしかすぎ去り、
後には天井が抜けたかのような青空と、呆然と佇む少女たちだけが残された。
「一体……、何が起こった、の？」
裸である事も忘れたかのように、ポツリ、とマミが零す。
「……ワルプルギスの夜が、消滅してしまった。
もうこの辺りに、魔女の気配は感じないわ」
何をどう説明していいかも判らぬままに、淡々とほむらが事実のみを述べる。
「どう言うこった？　くそ！　何か納得いかねえ」
「これは勝利、と呼べるのかしら、ＵＦＯマン……？」
『……』
それまでじっ、と亀のように押し黙ったいたＵＦＯマンが、

何とか自説を整理しようと口を開いた、刹那――！

――ド　ワ　オ　ッ　!!

「「――!?」」

突如、天空より飛来した巨大な何者かが、轟音と再び大地を揺るがす。

驚き仰ぎ見た少女たちの真上に、高々と威容の影が差す。

三人が目にしたもの、それは今までの魔女たちの異形とは異なり、あたかもファンタジー小説の1ページから飛び出してきたかのような【竜】であった。

一点の曇りもない、眩いばかりの白い肌に覆われたアルビノのドラゴン。

ただ一つ異彩を放つのは、その背に負った白銀の翼、

ばさりと広げた雄大な翼は、翼竜としてのそれではなく、

見る者に優雅な天使の羽毛を想起させる。

「なんだ、なんだありゃあ!?

あのバカでかい魔女が、ワルプルギスの夜を喰っちまったとでも言うのかよ?」

『――魔女?　魔女だと言うのか、アレが?

いや、アレはどちらかと言うと……!』

「そんな事はなんだっていい、それよりも、アイツが落ちた先は……」

「まどか……!」

即座に我に返ったほむらが、条件反射と言うべき速度でもって、

止める間もなく異形の巨体へ向けて風となる。

「くっ!　アイツ、あの娘の事になると見境なしかよ!?」

「待って!　杏子、私も……」

「お前は休んでな!　ほむらは私が何とかする」

マミの叫びを遮って、杏子もまたほむらの後を追いかける。

ポン、とＵＦＯマンが少女の肩へと手をかける。

『今の我々が言った所で、足手まといになるだけだ。

大丈夫、杏子ならきっとうまくやる』
「ＵＦＯマン」
残された瓦礫の跡で、少女がぐっ、と拳を握り締める。
ただの少女に戻ってしまった無力さを噛み締めて……。
・
・
・
人々の喧噪の流れに遡行して、少女が一人、災厄の中心地に向けてひた走る。
眼端で抜け目なく状況を確認すれば、
これほどの異常事態にも関わらず、以外にも怪我人が少ない事に気が付く。
竜の落ちた先が避難場所を逸れていた事に、
一つ安堵の息を吐いたほむらであったが、未だ状況は予断を許さない。
今はただ悠然と天を仰いでいるだけの竜だが、
あの巨体が一たび動き出せば、どれほどの被害が出るのか定かではないし、
何よりもほむらが守るべき少女、鹿目まどかの姿が見当たらない。
「おおぉーい！　暁美……、暁美さぁーん!!」
遠くからの自分の名を呼ぶ声に足を止める。
ほどなく、見覚えのある青髪のショートカットがこちらに走ってくるのを捉えた。
「美樹さやか」
「ハァ……、ハァ……、ゴメン、私が目を離したばっかりに……！」
「順を追って話しなさい、一体何があったの？」
「……キュゥべえが、まどかの前に現れて、何か吹きこんでたみたいなんだ。
その直後に、まどかの体が光り出して、
私は思わず、あの娘も魔法少女になっちゃうって思ったんだけど、
でも、その後、何も分からなくなって……」

「……そして入れ替わるように、あの竜が現れた。
だとしたらやはり、あの竜がまどかの不在と関係している」
近づくほどにその威容を増す巨体を見据え、再びほむらが踵を返す。
「待って！　暁美さん、私も一緒に……」
「気持ちだけもらっておくわ。
あなたの身にまで何かあったのでは、まどかに合わせる顔がないもの」
振り返る事なく、ほむらが一人歩を進める。
「まどかは必ず助ける。
マミさんも、杏子も、それにあなたも……、
もう、あんなワケの分からないものに私たちの邪魔をさせたりしない」
「暁美さ――」
美樹さやかの二の句を振り切って、次の瞬間、暁美ほむらは喧噪より姿を消した。
・
・
・
竜の巨体にほど近いビルディングの屋上に、ほむらが足を踏み入れる。
給水タンクの上に陣取って、冷静に周囲を観察する。
未だ呆けたように佇む異形の姿、だがそこに、探し人の姿を見出す事は出来ない。
「まどかぁ――――ッ！」
暁美ほむらが声を張り、必死に友の名を呼びかける。
「まどか！　私の声が聞こえるのなら返事をしてッ！」
暁美ほむらの叫びはしかし、少女ではなく竜によって報われた。
赤色に輝く両眼が、目下の小うるさい少女を捉え、瞬間、
ばさりと開いた翼のひとひらひとひらより、光弾が矢の雨となって降り注ぐ。

「――ッ！」
反射的に時間を止めてタンクより飛び降りる。
慎重に射線より体を逸らして直撃を避けるも、面となった攻撃を弾き返す事は叶わない。
時間が動き出すと同時に、光弾の群れがビルの壁面を強かに捉え、ほむらの体が瓦礫と共に床面を滑り落ちていく。
「バッカ野郎がァ――――ッ!!」
間一髪、瓦礫の雨を縫うように、佐倉杏子が強襲飛翔棍にて飛来する。
左手でほむらを抱えつつ、右手では雀落としを繰り出して、伸ばした穂先をかろうじて残った柱へと絡ませる。
「……ったく、先走ってんじゃねえよ、状況はどんなだ？」
「どうもこうもないわ、まずはアイツを何とかしなければ、何も分からない」
「ハン、分かり易くていいな」
軽口を叩く少女たち目がけ、竜が矢の第二射を走らせる。
瞬間、ほむらが再び時間を止める。
膨大なる光の矢の雨が、ピタリと時間の壁に固定させられる。
「おおおおおおおおおおおお！」
斜めになった壁面を杏子が駆ける。
引き抜いた棍を、今度は静止した矢の一本に向けて撃ち放ち、勢い良くスパイダーマンのように空中へと踊る。
「――！　杏子、アレを」
「ムッ」
傍らのほむらの意図を理解して、巨竜の頭部目がけて矛先を変える。
近づく二人の視界の先で、竜の額に収まった巨大な宝石が淡い輝きを放つ。
「なんだアレは、まるでデッかいソウルジェムみたいじゃねえかッ!?」
「アレがもし、魔法少女のソウルジェムに相当する部位だと言うならば……」

「攻略ポイント、だな！」
杏子が力強く棍を引き寄せ、二人の体が一気に上空へと飛び跳ねる。
煌めく宝石を射程距離に捉え、少女の腕の中でほむらが愛用のデザートイーグルを構える。
――だが、
「……！　待てッ、ほむら!!」
「そんな……！」
淡いピンクの煌めきを零すソウルジェム、その正体に二人が気付く。
透き通る巨大な宝石は、まるで琥珀か虫アメのように、一人の少女を体内に捕えていたのだ。
「まど、か……？」
呆然とほむらが呟く内に、必殺の時は虚しく過ぎ去り――、
直後、宝石から放たれた眩いばかりの輝きが、二人の視界を埋め尽くした。

五話「私がイクしかないじゃない！」

「ン……」

眩しい日差しを瞼越しに感じ取り、暁美ほむらが苦しげに瞳を開く。

徐々にクリアーなっていく視界と思考の中で、現在の自分が置かれた状況を確認する。

自らの格好を顧みれば、それは見滝原中学の制服姿。

おそらくは戦いの最中に気を失い、変身が解けてしまったのであろう。

ゆっくりと両手で結んで開いてを繰り返す。

先の攻撃によるダメージは奇跡的に皆無であったが、

ほむらはしかし、自分自身の体から、どこか言い現わしがたい奇妙な違和感を感じていた。

「――よう、ようやく起きたか？」

「暁美さん！　良かった」

ゆっくりと声の方を振り返れば、そこには同じく私服姿に戻った佐倉杏子と、

学校指定のジャージに身を包んだ巴マミ。

それに先ほどより、幾分落ち着きをとりもどした美樹さやかの姿があった。

「佐倉杏子、あなたの方は大事無いの？」

「おかげさまで、腹立たしいくらいにピンピンしてるよ。

何せ久方ぶりの、健康な生身の肉体だからね」

「――生身の、体？」

杏子の迂遠な言い回しを受け、ハッ、とほむらが違和感の正体に気付く。

「……私、ソウルジェムを！」

「粉々に砕かれちまったよ、アイツに。

何だか知らないが、私たちは魂を無理やり元の肉体の方に戻されちまったんだ」

言いながら杏子が忌々しげに目を細める。
見据えた彼方に映るのは、先ほど二人を襲った【竜】の姿。
異形の巨体は相変わらず不動のまま、悠然と天空を見上げているものの、
心なしかその両翼は、先ほどより白銀の輝きを増しているように見えた。
杏子の言葉の意味を、呆然とほむらが反芻する。
ソウルジェムこそは魔法少女の魔力であり、命そのものである。
生身の肉体など、彼女たちにとっては外付けのデバイスに過ぎない。
その一線が、魔法少女と生身の人間の運命を分かつ境界であった筈なのに……。
「そんな、まさか……、
魔法少女は絶望によって魔女に至る一本道のハズ、
インキュベーダーの狙いは、魔法少女が魔女に孵化した際のエネルギーを回収する事。
その魔法少女から絶望を奪う魔女だなんて、存在自体が矛盾しているわ」
『……だが、もしもあの竜が、魔女とは別の存在だとしたら、どうかな？』
と、それまで沈黙を決め込んでいたＵＦＯマンが、意味ありげに呟きをこぼす。
「魔女とは別の存在……、あなたには何か、心当たりがあるのね？」
『多分、アレはきっと我々が【怪獣】と呼ぶ生物だ。
恐らくは幾つかのアクシデントが重なった事により、
彼女――、鹿目まどかは魔法少女とは別の生命体となってしまったのだ。
強いて名付けるならば、そう……【大怪獣まどゴン】に!!』
「…大！」
「……怪獣」

「……まど」
「……ゴン？」
「……　……」
『……ん？　どしたのみんな、そんな怖い顔して？』
シン、と白けた空気が周囲を支配する。
遠い目を明後日の方角に向けるマミ、無言で首を振る杏子、
冷然と凍えるような視線を浴びせるほむら、がくりと大きく肩を落とすさやか……。
「……あのさあ、やめなよアンタ、こんな時に。
こっちは真面目な話をしてるんだからさあ」
『な、何だと!?　私だって至って大真面目に……、
いや、分かった！　と、とにかく名前の方はもういい！』
「私たちに分かるように話して頂戴。
そもそも、あなたの言う怪獣と言うのは、一体、何なの？」
『ウム。
その前に、私の方でもいくつか確認しておきたい事がある。
……と、言うワケでそこの珍獣、いい加減に出てきたらどうだ？』
ＵＦＯマンからの唐突な指名を受け、瓦礫の影よりのそり、と白い獣の前脚が覗く。
あっ、とマミが小さな呟きをこぼす。
「キュゥべえ、あなた……」
『ようやくお出ましか？　きゅっぷいランドの白い悪魔め』
「やあ、君にその名で呼ばれると言うのは、
僕としても中々に感慨深いモノがあるのだけれど……」
『おい、思ってもいない嘘を吐くなよ？
お前らにそんな繊細な感情があるのなら、
まどか君をあんな姿になるまで追い込んだりするものか』
「それはとんだ誤解だよ。
現在の状況は、彼女が自分の意思に基づいて行動した結果もたらされたものだ。
それに彼女が決断しなければ、君たちはワルプルギスの夜に敗北し

ていた可能性が高い。
僕の助言が、あの場面において不適切なものだったとも思えないよ」
「こ、こいつ、よくもしゃあしゃあと……！」
涙目で詰め寄ろうとするさやかを遮り、ＵＦＯマンが渋い表情で言葉を重ねる。
『一つだけ確認しておこうか。
インキュベーダー、お前はまどか君との契約をしくじった。
そのせいで彼女は、通常の魔法少女とは異なる変態を遂げてしまった……、そうだな？』
「……その点については返す言葉もないよ。
確かに僕たちは、鹿目まどかと言う特異点の存在を軽く見過ぎていた」
などと、口では殊勝な事を言いながらも、
一切悪びれる様子もない珍獣の懺悔が始まる。
「あの時、鹿目まどかが願ったのは、
現在、過去、未来全ての魔女を滅ぼして、魔法少女たちの絶望を呑み込む事。
その望外過ぎる願いはやがて、この宇宙の因果律までをも捻じ伏せて、
今頃はまどかと言う新しい神様の元、世界の秩序が再構築される……筈だったんだけど」
『そこでヤツらに出し抜かれたと言うワケか。
フン、宇宙の深淵を覗いた事もない青二才が、
世界の管理人気取りで火遊びを繰り返すから、こう言うしっぺ返しを喰らうハメになる』
「その口ぶりからすると、
やはり君には、鹿目まどかを襲った敵の正体に見当がついているようだね？」
『……【宇宙生命体】と呼ばれる、原始的な生物がいる。
普段はスライムかアメーバーのような姿で宇宙を漂っているが、

知的生命体の持つ、ある種の感情から生み出されるエネルギーを捕食して、
我々が怪獣と呼ぶ姿へと変貌を遂げる。
おそらくまどか君はその変態の最中、怪獣の核(コア)に取り込まれてしまったものと考えられる』
「ある種の感情……、それは例えば、M・O・E・みたいなものかしら？」
ぽつりとこぼれたマミの疑問の声に、珍しく神妙な面持ちでUFOマンが首を振るう。
『奴らが専ら好餌とするのは、裏M・O・E……、
【M（見てくれ！）O（俺の）E（エナジー）】と呼ばれるエネルギーだ。
君たちの言葉を借りるならば、自己顕示欲や情熱と言った類の感情だな。
内に高まるM・O・E・とは真逆の、外に向かって発露する力と言えるだろう』
「自己顕示欲、かい？
確かにあの時、鹿目まどかはあらゆる時空を超えた全ての魔法少女達に、
自らの存在を知らしめようとしていた。
彼女の純粋な願いが、図らずも裏M・O・E・に
類似したエネルギーを生み出してしまったと言う事だね」
『そして、更にタチの悪い事に、怪獣たちの行動原理、能力は、
核を構成する裏M・O・E・の性質に準拠する。
まどか君の願いが、魔女の消滅と魔法少女の救済であったと言うのならば……』
「あの怪獣の前では、全ての魔女は魔力を奪われ消滅し、
魔法少女は問答無用でタダの少女に戻されてしまう。
成程、それでようやく理解が追い付いたよ。
世界中の魔法少女たちが現在進行形で力を失いつつあるのは、そう言う事情だったんだね」

『……！　な、何……だと……？』
「おや、流石にそこまでは気付いていなかったのかい？
もう一度、あの怪獣の足元を良く見てごらんよ」
キュゥべえに促され、一同があらためて怪獣の全容を見つめ直す、
よくよく観察すれば、相も変わらず白一色の上半身に対し、
その爪先はまるで大地に根を張ったかのように深々と喰い込み、
およそ生物とは思えない茶褐色に染まり始めていた。
「……あれは、何なの？　アイツ、まるで植物の根っこみたいに」
「おそらくはその表現で正解だよ、美樹さやか。
あの怪獣は、大地と一体化した足元から、この地球にネットワークを張り巡らして
地上に溢れる全ての魔力を探索しているんだ。
今頃世界中では、多数の魔法少女たちを相手取って
先ほどの君たちのような絶望的な戦いが繰り広げられているはずだよ」
「……ッ、他人事みたいに言ってんじゃねえッ」
どこまでも達観した珍獣の態度が腹に据えたのか、
佐倉杏子が苛立つように真っ赤なポニーテールをかき上げる。
「何が宇宙生命体だよ。
おいキュゥべえ、お前らは有史以来、
何千年も地球の女の子を喰い物にしてきたのが自慢だったよな？
それが何だって今更、よりによってこのタイミングで、
そんなワケ分かんねえのに出し抜かれたりしちまったんだよ？」
「その件についても、今ならある程度の仮説が立てられる。
彼ら宇宙生命体がこの地球に飛来した理由。
それはきっと、あの特異の魔女、
ワルプルギスの夜が活動を盛んにしていた事が原因だね」
キュゥべえの断定に、渋々ながらＵＦＯマンが頷く。
『ああ、恐らくはな。
他の魔女と違い、固有の結界に隠れる事を由とせず、

己の力を誇示するかのように災厄を振りまいてきた【舞台劇の魔女】。
奴ら宇宙生命体にすれば、彼女は高濃度の裏Ｍ．Ｏ．Ｅ．を常時放出する好餌にも等しい。
彼女の存在が呼び水となって、宇宙の辺境にいた奴らが呼び寄せられたに違いあるまい』
「けれど彼らが地球圏まで辿り着いた時、
肝心の魔女は、君たちの活躍によって少なからず疲弊していた、
そして時を同じくして、件の魔女以上の新鮮なエネルギーを放つ少女が現れた」
「……それが鹿目まどか。
結果、あの子は、まどかは怪獣の体内に取り込まれてしまった、のね？」
ぎりり、と暁美ほむらが奥歯を噛み締める。
一度はもう、時間を巻き戻さないと心に誓った少女であったが、
その【力】そのものを奪われた現状は、
どうしようもない歯痒さをもって少女の心を傷つけていく。
「で、でも、それじゃあ、この後、まどかはどうなるのさ？」
震えるさやかの声色に、シンと周囲が静まり返る。
「まどかは、元の姿に戻れるんだよね？
このまま世界から全ての魔女がいなくなって、彼女の願いが叶ったなら……」
『さやか君……』
「残念だけど現状のままでは、彼女の願いは半分も叶ったとは言えないんじゃないかな」
深刻な空気も物ともせず、感情なき知的生命体が、淡々と事務的に事実を告げる。
「鹿目まどかの願いは、全ての魔法少女の救済。
現在を生きる君たちは、確かに彼女の力によって、ソウルジェムを砕かれ無理やりに救われた。
将来再び魔法少女たちが悲劇を繰り返す可能性も、ほぼ潰えたと

言っていい。
けれどそれだけでは、過去に魔法少女であった者たちが救われた事にはならないだろ？」
オオォォ、とキュゥべえの言葉を肯定するかのように、
彼方より怪獣の寂しげな咆哮が轟く。
「ご覧よ、あの竜の広げた翼の輝き。
あの羽の一つ一つが魔法少女たちの魔力、祈り、奇跡の力そのものだ。
この惑星を十回焼いても釣りがくるほどの莫大なエネルギー。
それはつまり、この上まだ、彼女が次の局面を想定している事の証だよ」
「だけど、そんな力があった所で……、
もう死んじまっている奴らを、一体どうやって救おうって言うんだよ？」
「さあ、流石に僕にもそこまでは？
あの怪獣の頭を開いて見るわけにもいかないしね」
無責任に首を振るうキュゥべえの傍らで、
珍しくも深刻な表情の異星人がゆっくりと顔を上げる。
『――その昔、退廃に向かう母星の危機を救うため、
故郷に小惑星を落下させて、
人が住めなくなる程度に破壊しようと考えた男が居た……』
ポツリ、と零れたＵＦＯマンの呟きに対し、
たちまち少女たちの頭上にクエスチョン・マークが浮かぶ。
「……ええっと、ＵＦＯマン、こんな時に何のたとえ話かしら？」
「何なのそいつ？　馬鹿なの？　死ぬの？」
『ああ、確かに今にして思えば、そいつってホント馬鹿だ。
しかも心の中ではいつもお母さんを探し求めている純粋な人で、
タイマンで負けた途端すごい勢いで負け惜しみを始めるような情けない奴だった。
だが、それでもその男の行動は、一つの真理を示しているのだ。
即ち……、土台を治そうと思ったら、

まずは積み木を全て崩してしまう方がてっとり早い』
「――！　ビッグ・バン……、
大怪獣まどゴンは、現行の宇宙を消滅させるつもりだとでも言うのかい!?」
「――!?」
ビッグ・バン。
ＳＦ小説か、さもなくば超インフレバトル漫画くらいでしかお目にかかれないキーワードの登場に
たちまち少女たちが色めきだつ。
「いや！　いやいやいや、いくら何でもそんな……」
「あり得ないわ！
宇宙を一度滅ぼした所で、魔法少女を救えなかった事実が消えるワケじゃない。
そんな不条理、あのまどかが選択するとは思えない」
『暁美ほむら……、あれはもう、君の知っているまどか君ではない。
怪獣の根幹にあるのは、あくまで原始的な本能のみ。
アイツに知性や愛情などを求める事はできんよ』
「それに、本当にあの怪獣に、ビッグ・バンを引き起こす力があるかどうかは、
僕らにとっては大した問題ではない。
一つだけ確かな事は、あの膨大な魔力が一度に解き放たれたならば、
少なくともこの銀河系は丸ごと吹っ飛ぶと言う事実だけだ」
『フン、ざまあないなインキュベーダー。
せいぜい次の宇宙では、
エントロピーを危惧する必要がない世界が生まれる事を祈っておくといいさ』
「おや、君もずいぶんと投げやりになったね？
けれど、その気持ちはよく分かるよ、ＵＦＯマン」
感情が無い、と言う謳い文句を証明するかのように、
この段になってもどこか他人事のようにキュゥべえが語る。

「彼女は幾つもの偶然の積み重ねによって誕生した、文字通り魔法少女にとっての天敵だ。
勿論、現行の人類の兵器が束になった所で太刀打ちできる相手では無いし、
彼女に勝てる駒を用意するような時間もない。
僕の方は文字通り万策尽きた、まさにお手上げってやつだ」
「あら、そのセリフはちょっと違うわよ、キュゥべえ」
「――え？」
言いながら、巴マミが軽く一伸びして、
しかる後に完璧なシャフ度でもってインキュベーダーに振り返る。
「遠まわしに逃げ道を塞いでいくのが、いつもの貴方のやり口らしいけど、
そんなんじゃ人の気持ちは動かせないわよ？
それとも感情を持たない貴方たちでも、
自分より下等と見下す相手に頭を下げるのは、嫌なものなのかしら？」
「お願いしますマミさん、どうか僕たちを助けて下さい」
いともあっさりと、事務的に、清々しくもキュゥべえが頭を下げる。
ふぅっ、とマミが呆れたようにため息を吐く。
「まあ、貴方たちならそんなものなんでしょうね。
……ＵＦＯマン、もう一度だけ変身するわ」
『ああ、とは言え本日もう二回目だからな、あまり長くはもたないぞ』
「ワンチャンスあれば十分よ」
「って？　お、おい、待ってって!?　無茶だマミ！」
まるで休憩明けの部活動にでも望むかのように、軽く腰を上げた二人に対し、
あわてて杏子が立ち塞がる。
「アイツはワルプルギスの夜ですら呑み込んじまうような化物なんだぞ！
万全の状態のアルティメットマミさんですら、
あの魔女には太刀打ちできなかったって言うのに、今更――」

「それは、私が、M．O．E．と言う物の本質を履き違えていたからよ、杏子。
けれど今は違うわ」
そっと、巴マミがほっそりとした指先を向ける。
その先には、呆然と天空を仰ぐ白竜を取り囲む群衆が見えた。
「見て、避難所を飛び出してきたあの人だかり、それに報道のヘリまで……、
今やこの見滝原市中の全ての目が、あの怪獣の動向に注目していると言えるわ」
「……そうか、そう言う事か」
「あ、あんな所に巨大化して飛び込むのは、
想像しただけで恥ずかしくて、死にたくなるほど辛い事なんだけど、
けれど、だからこそ、あそこでなら今までに見せた事も無いような、
最大レベルのM．O．E．を放つ事が出来ると思う」
「アルティメットマミさんの能力なら十分に勝機はある。
それは僕からも保障させてもらうよ。
まどゴンは確かに過去最強の魔法少女を素体とする怪獣だが、
そのリソースの大半は【魔女を滅ぼす】と言う特性に費やされている。
額に十分な衝撃を与えさえすれば、その核を砕く事も可能なはずだよ」
「核を砕く……、待って！
そんな事をしたら、まどかは……、まどかはどうなるの!?」
振り絞るように放たれた、ほむらの悲痛な声に、
明るくなりかけた雰囲気が再び陰る。
『……裏M．O．E．の結晶体である核を破壊する。
それ以外の怪獣の攻略法を、私は寡聞にして知らない。
そもそも、生身の人間が怪獣の核に取り込まれてしまう事自体が異例のケースなのだ』
「イヤッ！　そんな話、聞きたくは無いッ!!」

「……暁美さん」
「……お願い……、お願いマミさん、まどかを殺さないで……」
水を打ったように静まり返った空気の中で、ただ少女の慟哭のみが響き渡る。
もしもこの世界が、未だ魔女の呪いに縛られたものであったならば、
少女の祈りと絶望が、近い将来に新たな局面を作り出していたかもしれない。
だが、この世界にもはや魔女はいない。
ただの少女と、その少女たちをこよなく愛するヒーローがいるだけだ。
「……もう、ダメじゃないＵＦＯマン。
ちゃんと彼女に分かるように、最後まで説明してあげなきゃ」
「えっ？」
ぱちくりと瞳を瞬かせるほむらの前で、マミがぷっくりと頬を膨らませる。
「暁美さんには、前に話した事が無かったかしら？
ＵＦＯマンには、他人の肉体を再生させる特技がある。
その力で私は過去に一度、彼から命を救われたんだ……って」
「あ……！」
「私のＭ．Ｏ．Ｅ．で怪獣の核を破壊したら、すぐに変身を解除する。
その後でＵＦＯマンが鹿目さんの肉体を再生させれば、それで全て解決よ」
「マミさん……、本当に？」
『おいおいマミ、君は簡単に言ってくれちゃってるけどさ～。
アレは一回やっちゃうと、
私、ものスゴ～～～～～～っく疲れちゃうんだけど？』
「男の子でしょ？　いちいち文句言わないの！」
予定調和の掛け合いを重ねつつ、ＵＦＯマンが見事なイチモ……、もといをにょきりと伸ばす。
「暁美さん、さっきも言ってわよね？

魔女は魔法少女が決着をつけるべき存在だ、って」
「……」
「だとしたらやっぱり、あの怪獣は私とＵＦＯマンの力で倒すべきだわ。
だから大丈夫、後の事は全て、私たちに任せておいて」
「……マミさん、ま、待って……！」
『――さあ、イクぞマミ！　準備の方はいいか？』
「ええ、今度こそ本当に終わりにするわ！」
思わず引き止めようと差し出された暁美ほむらの手をすり抜けて、
巴マミがＵＦＯマン自身をぎゅっと握りしめる。
『たかが怪獣ひとつ！　私とマミで押し出してやる』
「――アルティメット、フィナーレ」
どこか寂しげに瞳を閉じたマミの頭上に、ヒーローの無垢なる情熱が降り注ぐ。
エントロピーを飛び越して高鳴る少女の想いが、
その手に、その腕に、その脚に溢れだして、無限の力となって膨らんでいく……。
（……ありがとう、ＵＦＯマン）
（ン？　どうしたマミ、今更になって……）
（さっきの、私の嘘に、話を合わせてくれた事）
（……ウム、さっきはほむら君の手前、ああ言ったものの、
私の力ではもう、どうする事もできん。
今の私には、まどか君に分け与えるための肉体が、もう残されていないのだ）
（それを聞いて安心したわ。
彼女の蘇生に費やせる肉体さえあれば、
鹿目さんを助ける事が出来る、そうでしょ？）
（何を……、ま、まさかッ!?
巴マミ、君の体を……！
馬鹿な！　私にそんな残酷な事をしろと言うのか!?）
（ねえＵＦＯマン、彼女は、鹿目まどかは何も悪くない。

ただひたむきに、私たちの幸福を祈ってくれただけの女の子よ）
（……）
（彼女の事を、絶対に諦めたくない、絶対に助け出したい。
だからお願い、私の我侭を聞いて下さい）
（……マミ、君は）
・
・
・
「ああーっとォ!? み、みなさん、あれをご覧下さい！
スーパーセルの到来に震える見滝原市を襲った、突然の怪獣騒動！
混沌とする現場に呼応するかのように、今、新たな巨人が姿を現わしましたッ!!」
「あれは……！ に、似ている……。
黄色と白のツートンカラーのスーツ、額に輝く青色の宝石、
滑らかなロールを描くブロンドのツインテール、
そ、そして何より、見るもの全てを虜にすると言うあの巨乳～～～～ッ!!
彼女の姿は、全てがあの【アルティメットマミさん】の目撃条件と一致しますよッ！」

――アルティメットマミさん、現る。

巨大なおもちゃ箱を引っ繰り返したかのような災害と怪獣騒ぎの果て、
満を持して登場した見滝原のヒーローの勇姿を前に、
取り巻く野次馬のそこかしこからざわめきが溢れだす。
「アルティメットマミさんだって!?」「あんなの、ただの噂話じゃ……」
「間違いないわよ、あんな凄いおっぱい、忘れたりしないわ」
「そう言えば私も、夢の中で、会った、ような……？」
「馬鹿な、お前ら揃いも揃って……」

「いい加減にしてよッ！　みんな!!
アルティメットマミさんは、現にあそこにいるじゃないッ!?」
――周囲のノイズを引き裂いて、青髪の少女が悲痛な叫び声を上げる。
「みんな、誰も知らないかもしれないけれど、
それでも彼女は、いつもああやって一人で、この町の平和を守り続けてきたんだよ！
それがマミさん、アルティメットマミさん……、
みんなが覚えてなくたって、私たちの最高のヒロインなんだァ――――ッ!!」
「うんにゃ！　ボクは忘れてはいないっすよッ!!」
「――！　つ、つぼみ先輩!?　いつの間に……？」
「みんな、全てはさやかちゃんの言う通りっす！
白絹！　ヴィヴィ！　こう言う時は絶唱と相場が決まっているっすよ！
ボクたちの全身全霊を込めた【マミさんのテーマ】で、
彼女にフォニックゲインを届けるっす！」
「うん……！　うん！　さすがつぼみ先輩、頼りになるっす！」
遥かな因果を捻じ曲げて、今、ガチリと固い握手を組んだ二人の少女。
奇跡が繋いだ魂のクロスオーバーに、オオオオ、と歓声が巻き起こる。
「ようし、そう言うワケだよ町内会長！
これまでアルティメットマミさんには、散々甘い蜜を吸わせてもらって来たんだ。
ここであの子たちに遅れを取るようじゃ大人が廃るよ！」
「オウよ詢子さん！　オレたち見滝原商店街の底力を見せてやるぜ」

「高校生特派員、諸星真、出撃!!」
「時に中沢くん！　男とは何ぞや？　大鐘音？　それとも喝魂旗？」
「えええええっ!?　お、押忍、両方じゃないかと……」
「ん～～～～～～～、その通りです!!　じゃぁ旗手お願いね!!」
「話は全て聞かせてもらった！　マミさんのテーマは僕が弾こうッ！」
「か、上条くんッ!?　いつ退院なされたんですの？」
「現代医学ナメんな！　ファンタジー！」
「院長先生!?　そんな、キャラまで変わって……！」
「きょ！にゅ！うっ！　きょ！にゅ！うっ！」
「落ち着いてください岡村さん!?　全国放送ですよッ！」
「ようし……、俺の体を、マミさんに貸すぞォ!!」
「ショウさんホントそう言う引出し多くて羨ましいッスよ」
「ヒャッハーッ！　マスターロリのステージだぁ道を開けろォ!!」

「見滝原がダメになるかどうかの瀬戸際なんだ！　ヤッてみる価値はありますぜ！」
「まみあん！　まみあん！」
「そうだねタッくん、マミさんだね」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――――――ッ!!!!!」

燃え盛る熱狂の中、中沢少年一世一代の雄叫びが遂にエントロピーを凌駕して、
見滝原商店街名物【アルティメット☆マミ塾旗】が、遥かな天空へとそそり立つ。
朋友の勇姿を見届けた上条が、愛用のバイオリンをゆっくりと構える。

――やがて見滝原の空に、史上もっとも流麗かつ素朴なマミさんの

テーマが響き始めた。

「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」
「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

「ガンバレー！　アルティメットマミさん！」「あなたの後ろには私たちがついているわ！」
「私たちの未来を！」「大切な友達を！」「自分自身の夢を掴み取れ、マミ！」

「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」
「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

少女たちの無垢なる歌声が、男たちの命の叫びが輪唱となり、
巴マミの胸の奥で柔らかな鼓動を刻み始める。
「……聞こえるか、巴マミ、君の名を呼ぶ彼らの声が？
君がこの見滝原で続けてきた孤独な戦いは、ちゃんと彼らにも届いていたんだ」
「ええ、ありがとう、ＵＦＯマン。
私、わたし……、わたし今、す　ご　く　恥　ず　か　し　い　」

万雷のエールを一身に浴びながら、
アルティメットマミさんが、一歩、また一歩と歩みを進める。
「オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　ォ　オ　ォ　ォ　――ッ!!」
大きく変わってしまった流れを取り戻さんばかりに、大怪獣が狂乱の咆哮を轟かせ、
直ちにありったけの光弾の嵐が超人目がけて降り注ぐ。
煌めく光の矢が命中する度に体を覆うスーツが爆ぜ、白磁のような白い肌が、
豊かに実りの時を迎えた豊丘が、健全な魅力にあふれた大ぶりの太ももがこぼれだす。
それでも尚、アルティメットマミさんは悠然とした歩みを止めない。
「聞いて、鹿目さん」
一足一刀の間合いに及んだマミが、剥き出しとなった両手を広げ、
その神々しいばかりの裸身を大らかにも曝け出す。
巨大乙女の全身からこぼれ出した淡い輝きに怯えるように、怪獣が一歩後ずさる。
「鹿目さん、私たちを脅かす悪い魔女はもういないわ。
暁美さんも杏子も、普通の女の子に戻る事が出来た」
幼子を諭すような優しい声色で、更にゆっくりと一歩を踏み出す。
「全部、あなたの優しさのおかげよ。
ありがとう鹿目さん、私の大切な友達を助けてくれて」
「……オォオォォォン」
巴マミの言葉を理解したかのように、優しげな瞳の竜が一つ嘶く。
「だから、だからね鹿目さん、もう頑張らなくてもいいの。
後は全部私に任せて。
私にも少しだけ、先輩らしい仕事をさせて」
広げた両手を前へとかざして、そっと竜の両頬を包み込む。
陽光が透き通る氷を溶かすように、親鳥の温もりが卵の目覚めを促すように。
神秘的な輝きを放つ竜の宝石に、ピシリ、と薄くヒビが入る。

（……ん）
柔らかな光を受け、鹿目まどかがゆっくりと瞳を開ける。
透き通るようなクリスタルのフィルターの先で、
在るがままの姿の乙女が、まどかの良く知る笑顔で微笑んでいる。
（マミさん……、キレイ……）
知らず少女の両頬を、つ、と一筋の涙がこぼれる。
野生の獣がそうであるように、惜しみなく生きる者の姿はそれだけで美しい。
「大丈夫、もう何も怖くないわよ、鹿目さん」
ゆっくりと巴マミが瞳を閉じて、その淡い唇を竜の額へと近づけていく。
「……ティロ・フィナーレ」

――そして淡い輝きが満ちる中、少女がポツリ、と最後の必殺技を口にした……。

最終話「ぜんぜん終わってないじゃない！」

『起きるのだ、巴マミよ』
「……うん」
待ち望んでいた男の声に促され、まるで予定調和のように巴マミが瞳を開ける。
ゆっくり辺りを見渡すと、やはりそこに広がっていたのは、奇妙に揺らめく赤一色の世界。
羊水のプールとでも戯れるかのように、しばし呆然と空間を漂う。
ゆっくりと顔を上げれば、そこにはやはり予想通り、
銀色のマスクに深紅のスーツを纏った巨人が佇んでいた。
「……こちらの世界でなら、昔の姿でいられるのね？　ＵＦＯマン」
『フフ、見ての通りさ。
まっ、こんな世界でくらい、少しだけカッコつけたっていいだろう』
気心の知れた者同士の挨拶を交わし、互いに軽く笑い合う。
だがマミはすぐ表情を改めると、ＵＦＯマンに先を促した。
「あれから、どうなったの？　みんなは無事なの？」
『安心して良い、全ては計画通りに終わったよ。
君の活躍のおかげで、大怪獣まどゴンは消滅した。
まどか君の蘇生の方も順調に進んでいる』
「そう……」
ほうっ、とマミが大きく息を吐く。
今やここは現世と隔絶された世界、己を飾る必要が無いとなれば、
清濁様々な感情が湧き上がってくるのだが、
それでも尚、一番に胸を突いて溢れだしたのは安堵の吐息であった。
「……良かった、うん、本当に良かった……」
『良いワケがあるか、こんなオチで。
ハッピーエンド以外の終わり方など、私は認めん』
「あ……」
珍しく窘めるような強い口調のＵＦＯマンに、

まるでお説教の前の子供のように、シュンとマミが俯く。
『全てはこれからじゃないか、マミ。
人々を脅かす魔女はもういない。
ようやく君は超人の使命から解放されて、普通の女の子の暮らしに戻れるんだ』
「それは……、でも、もう無理よ」
『無理なものか！　青春はいいものだぞ。
あの新しいお友達とお茶介したり、夏には海で水着でバカンスで、
その内に本当に好きな人で出会って、慎ましくも幸せな家庭を……』
「やめて！　聞きたくないわ、そんな話」
思わずマミが両耳を押さえ、ぶんぶんと頭を振るう。
いかにアルティメットマミさんが勇気と慈愛に満ちた超人であったとしても、
変身が解ければ年相応の少女に過ぎない。
ＵＦＯマンはしばし、すすり泣く少女の姿を無言で見詰めていたが、
その内にふっ、と人の悪い笑みを浮かべた。
『ところが、叶うんだな～これが。
何せ今回のまどか君の蘇生に関して、君の肉体には一切手を付けていないからな』
「……えっ？」
ＵＦＯマンの言葉の意味を掴み損ね、きょとんとマミが顔を上げる。
だが、その真意を理解した瞬間、はっ、とその顔色が青ざめた。
消えていく。
ＵＦＯマンの巨大な体躯が、背景を透過して徐々に赤色へと染まっていく。
「ＵＦＯマン……、あなた、まさか……！」
『いや～、まどか君の肉体を見たら、思いのほか損傷が少なかったのでな、

わざわざ君の肉体を使わなくても、私の残されたエネルギーを注ぎ込めば、
何とか蘇生は可能そうだと考えたんだよ』
「バ……、馬鹿ァ！　何で、何でそんな勝手な事するのよッ!?」
『とは言っても、ほら、今の私は君が居なけりゃ、タダのセクハラ超人だからな～。
それならもう、どっち道、同じ事だろ？』
「そんなの私はイヤよ！
私がどんなに嫌がったってずっと一緒にいるって、
あなたはそう言っていたじゃない!?」
『ああ、約束は守る。
いつだって私は君の傍にいるさ。
もっとも、君の周りにはもう、寂しい事なんて無いだろうけどな』
「お願い……、待って、待って……ＵＦＯマン！」
『泣く必要はないさ、マミ。
いつかまた逢える日が来る……、
ほら、なんて言ったっけ、こう言うの……？』
「……？」
『そう、確か……円環の……こと……わ……』
「ユ――！」
フッと空気が一瞬軽くなり、差し出したマミの手が虚しく空を掴む。
驚きの声を上げる間もなく、赤色の世界に溢れだした強烈な閃光が、マミの視界を塞いで……。
・
・
・
「――さん、しっかりして！　マミさんッ!?」
「……あ」
「ああ、良かった！　マミさん！　マミさん！」
がしりと熱い抱擁を受け、巴マミは再び現世で目を覚ました。

寝ぼけ眼の少女の鼻頭を、ふわり、と鮮やかな赤のリボンがくすぐる。
「ええっと……、鹿目、さん」
「ゴメンなさいッ！　私の、私のせいで、もう目を開けないいんじゃないかって……」
「バカ野郎！　あんな無茶して！　死んじまったらどうするんだよォ!?」
　状況を整理する暇もなく、ガクガクと両肩を力いっぱいに揺すられる。
　ちらりと視線を移せば、そこではいつかの日とは逆に、佐倉杏子がボロボロと大粒の涙をこぼす。
「でもマミさん、本当に無事で良かった」
「もう、マミさんの事は信頼してるけどさ……、でも、一人で何でもかんでも抱え込まないでよね」
　頭上から掛けられた、ほむらとさやかの労いもまた涙声であった。
　そこでようやく巴マミも、己の過ちに気付いた。
　マミが何よりも守りたかったものは、この五人の輪だ。
　ならば自らの命を顧みないような選択肢は、本来ならば絶対に選んではならなかったのだ。
　敢えて口にこそ出さなかったものの、きっと【彼】にもこの惨状が見えていたに違いなく……、
「UFOマン、は……？」
「……そう言えば、さっきから姿が見えないわね」
「まったくアイツったら、こう言う肝心な時に限っていないんだから」
「……うっ」
　じくり、とマミの胸が一層痛む。
　分かってはいた筈なのに、それでも理性を押し流そうとする熱情を抑えきれない。
「うぐっ　ぅ　わ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ～～～～～～んっ!!」
　泣く。

マミが泣く。
もはやヒーローでも魔法少女でも無いありふれた女の子が、
恥も外聞もなく、ただ在るがままの想いぶつけて泣きじゃくる。
「マ、マミさん!? どうしちゃったの？」
「おいおい、泣くなって、マミ、
アイツならその内ひょっこり顔を出すさ」
「ううん……、違う、違うのよ……！」
差しのべられた友人の手を振り払い、まるで童女のようにいやいやとぐずる。
「私には分かる、ＵＦＯマンはもう、どこにもいないの……」
「マミ……」
「彼は逝ってしまったの、そう、円環の――」
『……ぇ、えむ……おー……いぃ……、えむ……おー、いー……』
「ことわ……え？」

どこからともなく聞こえてきた、感動と初恋をブレイクする耳障りなノイズに、
思わず一同が言葉に詰まる。
訝しげに瞬く少女たちの視点は、やがて巴マミのけしからん胸の谷間へと集約される。
『――ふう、死ぬかと思ったぜ！』
「ＵＦＯマンッ!?」
もぞもぞと駄肉の山を掻き分けて、
今やピンポン玉サイズとなった僕らのヒーローがひょっこりと顔を出す。
相棒の変わり果てた姿を前に、あっ、とマミが驚きの声を上げる。
「ＵＦＯマン！ な、なんであなた、生きて……？
そ、それにどうしてそんなに縮んでしまったの!?」
『ウム……、

その時不思議な事が起こった、で片付けしまいたいのはやまやまだが、
強いて言うなら、魔法少女がくれた最後の奇跡、と言った所だろうか？』
「魔法少女の……？」
『ああ、そうだ。
あの時、大怪獣まどゴンが吸収した魔力の中には、
少女たちの無垢なる願い……、高純度のＭ．Ｏ．Ｅ．が込められていたのだ。
結果、そのエネルギーによって、まどか君の肉体の再生が促され、
私も土俵際いっぱいで踏み止まる事が出来たと言うワケだ』
「……」
『まっ、なんて言うの？　さすがは私だよね～。
我ながら実に完璧な判断だったわ、ダッハハハ……』
「……もう！　男の人は無茶ばかりしてッ!!」
『ムォッ!?　オオオオッッッ!!??』
感極まった巴マミが、その豊かなふたつの乙女で、
再びＵＦＯマンをむぎゅ～っ、と抱きしめる。
今やキーホルダーサイズとなってしまった僕らの超人が、成す術もなく母なる海へと沈んでいく。
『ふぉあああぁ～～、にゅ、乳マミさんは伊達じゃない……！』
「約束してＵＦＯマン！　もう絶対無茶はしないって、ずっと私の傍にいるって……！」
「あ、あの～、マミさん、気持ちは分かるんだけど……」
「ヤバいってコレ！　なんかミシミシ言ってる!?」
『いや……、構わん！　もっとひと思いにむぎゅぎゅ～！っとヤッてくれッ!!』
「うん……、うん……！」
むぎゅぎゅ～っ！
「～～～っじゃねえッ!?　やめろ馬鹿、ホントにマミの胸で死ぬ気かッ!?」

「……まさしく乳タイプ、ね」
「うまくねえよッ!? シャフ度キメてないで止めろほむら!!」
『嗚呼……、ゴメンよ読者諸兄。
僕にはまだ帰れるおっぱいがあるんだ、こんなに嬉しい事は無い。
でも……、おまいらなら分かってくれるよね？』

・
・
・

「――え～、おほん！ 遅まきではありますが、
みんなが無事に戦いを終えられた事と、
マミさんお手製のケーキの山を祝してぇ～～～～……カンパイッ!!」
「「かんぱ～い」」
「乾杯！ でも、そこまで期待されると、少し恥ずかしいんだけど」
「M・O・E・が出ちゃう？」
「もう、あまり先輩をからかわないで！」
悪戯っぽくぷっくりと頬を膨らませたマミの仕草に、自然、少女たちの笑いがこぼれる。
小洒落たワイングラスの代わりにテーブルの中央で重なったのは、
淡い色合いの紅茶が入った五つのティーカップ。
色とりどりのお菓子が置かれたマミハウスの一室に、たちまちに華やかな笑いが溢れだす。
闘争と絶望の日々は終わりを迎え、
いよいよ少女達の周りにも、ありふれた日常の空気が戻りつつあった。

――アルティメットマミさん最後の戦いより、一週間が過ぎようとしていた。

あの日『未曾有のスーパーセルと大怪獣が』
見滝原市内に残した破壊の爪跡は生半な物ではなく、
大災害を生き延びた人々は、早くも試練の時を迎える事となった。
が、それでも一人の超人によって結ばれた、見滝原市民の団結が崩れる事は無かった。
災厄の日、アルティメットマミさんと見滝原のみんなが起こした一つの奇跡は、
テレビカメラを通して全国のお茶の間に広がり、
後に『マミさん景気』と呼ばれる見滝原市の復興を生む事となった。
公共事業の投入と、新たな観光資源の取得に沸き返る見滝原。
超人の名付け親の美樹さやか女史曰く『元ネタのそっくりさん』である所の
巴マミ先輩の下にもまた連日のように報道が詰めかけ、
結果、少女たちの念願だった五人揃っての放課後ティータイムの実現には、
更に一週間の時を待つ事となったのであった。
今、ようやく重い荷物を手放して、
どこにでもいる普通の少女のように、巴マミが笑いを振り撒く。
鹿目まどかも、暁美ほむらも、美樹さやかも、佐倉杏子も、
今やすっかり普通の女の子達が、とりとめの無い雑談に笑顔の花を咲かせ合う。

『うんうん――、善き哉平和、善き哉女子会。
……あ、このアップルパイ、メチャうま』

――そしてベランダには女子たちの姿を見つめる、極めていかがわしい宇宙人の姿があった。

『いっや～、よくよく考れば覗き放題に食べ放題。
このチビッ子宇宙人ライフも、慣れてみれば意外と快適なもんだよね～。

うんうん、巴マミ、君はいいお嫁さんになれるぞ』
「……相変わらず君も、みみっちい事ばかりいっているようだね」
『ム……！』
スタリと欄干に飛び乗った招かれざる客に、ＵＦＯマンが怪訝な瞳を向ける。
『イノベ……、もといインキュベーター、
お前、まだこの辺をウロチョロしていたのか？
この惑星にはもう、お前の望むモノなんて有りはしないぞ』
「ああ、言われなくてももう、こちらは引き上げの準備を進めているところだよ。
僕達がこの星に長年かけて築き上げたシステムは、
鹿目まどかに完全に破壊されてしまった事だし、
まあ、知的生命体の持つ感情のリスクについて理解できただけでも、
いい勉強料だったと思う事にするよ」
『淫獣ざまあ、さあ帰れ帰れ！
お前がいると折角のマミさんのケーキがマズくなる』
「けどその前に、君には一つだけ聞いておきたい事があってね」
『……何？』
華やかなる室内の光景をガラスの瞳に写し、相も変わらず淡々と淫獣が語る。
「今回の件で、僕らにとってとりわけ不可解だったのは君の存在だよ、ＵＦＯマン。
結果から言えば宇宙滅亡の危機を回避する事となったものの、
そもそもこんな辺境の知的生命体を救う行為自体が、
君にとって何らかのメリットを生むとは思えない。
あまつさえ君は、一人の女の子のために超人としての肉体まで失ってしまっている」
『……』
「最後に一つだけ教えてもらえないかい？
あの少女たちとの関係が、君にとって何の利益に繋がるのかを」

『……あのなぁお前、まだそんな下らないこと言ってんの？
私としては人生の歓びや感動も知らず、ただ淡々とノルマをこなし続けるお前らの方が、
よっぽど理解できない生物なんだけど？』
「そう言うモノかい？
けど、感情は偶然の産物で、生存本能は生物の性だと僕たちは解釈しているよ」
『まっ、いいさ。
そんなお前らが私に興味を持ったと言うなら、それはきっと良い傾向なんだろうよ。
ほれ、お前らの母星にテレビがあるなら、こいつで少しは勉強するといい』
「君がお土産とはね？　いったい何を……、
あっ!?　こ、これはポニーキャニオンから絶賛発売中！
２００５年の放映当時には低予算と丈の短さに苦しみつつも、
一部の豚どもにジャイアントフェチと言う忌まわしい性癖を生み付ける事に性交し、
早過ぎた迷作と各所で言われたり言われなかったりする伝説の作品――、
【ＵＧ☆アルティメットガール　アルティメットＤＶＤＢＯＸ】じゃないか～！」
『フフ……、宣伝乙だなキュゥべえ。
実家に帰ったら部屋を明るくして画面から離れて観賞すると良い。
Ｍ．Ｏ．Ｅ．の何たるかを理解できるまで、
思う存分モニターをｐｒｐｒしてくれても構わんぞ』
「Ｕ、ＵＦＯマン、君ってヤツは、
君ってヤツは本当に……、本当にワケがわからないよ」
・・・

――かくてインキュベーダーも去り、地球は再び魔法少女とは無縁の惑星となった。

ひとつの戦いは終わりを迎え、それでもなお、物語は続いていく。
少女たちの戦いより一ヶ月後、地球は、そして見滝原は――！

≪ウェヒヒ～♪≫

「あぁ～っとォ!? ご覧下さい!!
怪獣ぷちまどゴンが今、見滝原市役所前に姿を現わしました！
怪獣の着ぐるみを被った女の子と言う外見で、見滝原のマスコットとなっている珍獣ですが、
その全長は実に３０メートル超と言う巨大なドジッ娘ッ!!
現地では詰めかけたまど豚の間で、少なからぬ被害が発生している模様です！」
「誰か今、まどさんの事ブタって言った!?」
「誰もそんな事言ってません！
とにかく、現場では環境保護団体と地元の猟友会が衝突する一幕もあり、
今なお緊迫した状態が続いております。
見滝原市では、まどゴンを餌を与えないようにと引き続き警告を――」

……一ヶ月後、見滝原は【まどゴン銀座】と化していた。

「……か、怪獣、ぷちまどゴン？」
「な、なにあれ？ あんなの絶対おかしいよ……」
「おっきな、おっきなまどかが……！」
「……鼻血ふけよ、ほむら」

「ちょ、ちょっと!?　どう言う事なのＵＦＯマン!?
戦いはもう終わったんじゃなかったの？」
『ア、アワワ!?　お、落ち着けマミさん』
久方ぶりに涙目で詰め寄ってきたマミさんを前に、
しどろもどろになったＵＦＯマンが解答を探す。
『えっと、ほら、大怪獣まどゴンが消滅した時、
奴が消化しきれなかった大量の裏Ｍ・Ｏ・Ｅ・が、街中に拡散されたんだよね。
それが後から来た宇宙生命体に取り込まれたせいで、
新たな怪獣が誕生しちゃったみたい……』
「みたいって……、そんな」
「よっしゃァ――ッ!!
言ってる事はイマイチ分かんないけど、
これはもう、アルティメットマミさんの出番だよね！」
「――!?」
突如としてキラキラと輝かせ始めたさやかちゃんとは対照的に、
さっ、と巴マミの顔面から血の気が引く。
「おっ!?　おおおおおおおお落ち着いてちょうだい美樹さん!!
ほら、あの怪獣って人畜無害みたいだし、
いたずらに被害を拡大させるよりも、まずは政府の対応を見てからのほ――」
「ほ、ほむゥッ!?」
マミさんの必死な弁明を遮って、イキナリ中空に鮮血の花が咲く。
「わ～～～～～っ!?　ほむらちゃんが吐血したッ」
「おいおい、何やってんだよほむら、
何も最終回で変なキャラ付けしなくても……っておいッ!?
どうなってやがるんだ、こいつ瀕死じゃねえかッ!?」
『……決まりだな、悠長に閣議決定など待っている余裕は無い。
早い所アイツを何とかしないと、暁美ほむらが萌え尽きる!!』

「嘘だろほむら……！
　これが、こんなものがお前の見たがっていた未来なのかよォッ!?」
「……おっきなほしが、ついたりきえたりしている……、
　……おおきい、まどかかな？　いいえ、ちがう、ちがうわ……、
　まどかはもっと、パアァ――って、うごくもんね……」
「イヤだ……、こんなの、嫌だよう……」
「そ、そんな……」
　よろよろと、まるで助けを求める子牛のように、巴マミが辺りを見回す。
　応える者はいない。
「美樹さんッ！」
「大丈夫！　私も見滝原の人たちも、みんなアルティメットマミさんの味方だよ!!」
「杏子ッ!!」
「すまない……、すまないと思っている……」
「暁美さんッ!!!」
「……かゆ……うま……」
「お願いマミさん！　ほむらちゃんを助けてッ!!」
「～～～～～～～～ッッッッ!!!!!」

　――嗚呼。
　少女の瞳から、淡い希望が一粒の雫となって大地に零れる。
　もしも彼女が魔法少女であったならば、そのソウルジェムは立ち所にドス黒く染まり、
　今頃は三千世界を灼き尽くす災厄の魔女が降臨していた事だろう。
　だが、今の彼女はただの女の子。
　超人に生まれ変わる宿命を背負った、どこにでもいる普通の女の子だった。
（……ここだけの話なんだがな、巴マミ）
（――！）
　ぼそぼそと、ＵＦＯマンがマミの耳許で囁きかける。

（実は今回、私と　合　体　出来るのは、君たち一家だけではない。
そう、私の肉体を分け与えた、あの鹿目まどか君も、
超人に変身する資格を得ているのだ……）
（……ッ!?）
『まっ、君がどうしてもイヤだって言うなら仕方がない。
そもそも今回の件は彼女の勇み足が原因みたいなモンだしぃ～。
次回からは新番組【　ＵＭ☆アルティメットまどか　】はじまるよ～と言う事で……』
「こッ、この、外道がァ――――――ッ!!!!!」
めいいっぱいに涙を振り絞り、巴マミが雄々しく叫ぶ。
「分かったわよ、私がヤる、わ、私がイケばいいんでしょ？
だから彼女にだけは手を出さないでッ!!」
『フフ、もちろんだよマミさん！　君以外に私のパートナーなどいるものか』
言いながら、ＵＦＯマンが随分と可愛らしくなったナニをニュインと伸ばす。
『さあ　合　体　だッ！　アルティメットマミさん、イキま～～～～～～っす!!』
「ア、アルティメット、フィナーレエエエエエ――――――ッ」
・
・
・
「ああーっとォ!?　ご覧下さいッ！
ついに我らのヒーロー、アルティメットマミさんが姿を現わしましたッ!!
ここ見滝原市役所前で、世紀の一戦、アルティメットマミさん対怪獣ぷちまどゴンの
時間無制限一本勝負が始まろうとしております」
――アルティメットマミさん現る。

まるでその時を待ち侘びていたかのように、周辺には特設の野外会場が作られ、
商魂たくましい見滝原商店街の屋台が並び、
詰めかけた観客達が奇跡の巨大娘に一斉にフラッシュを焚く。
「うう、は、恥ずかしい、私もう、普通の女の子に戻ったハズなのに～」
『まあ、アイツを倒せばいつだって女の子ライフに戻れるさ。
そう、多分週6くらいでな！』
「なんで週イチで怪獣が来る計算なのよォ～」
必死な叫び声を上げ、アルティメットマミさんが自分のデコに抗議する。
『う～ん、ホラ、この星って余計な裏M．O．E．に満ち溢れすぎてるじゃん、ハーメルンとか』
「うぐっ、た、確かに……」
『アルティメットマミさんが活躍する→薄い本が大人気→若者の裏M．O．Eが発散される→
宇宙生命体がやってくる→怪獣が生まれる……』
「マッチポンプじゃないの!?　いつ戦いは終わるのよッ!!」
「それを聞いて一安心だよ、僕たちも戻ってきた甲斐があったってものだ」

「『キュ、キュゥべえッ!?』」

突如会話に割り込んできた謎の声に、内外で驚きの声がシンクロする。
果たしてマミさんの巨大チャーミングヘッドの上には、件の珍獣がこれ見よがしに座っていた。
『インキュベーダー、貴様、なぜ……って言うか私とマミの上から降りろ～!?』
「いやあ、あれから少し考えたんだけどさ。
今から新規の事業を立ち上げるよりも、
アルティメットマミさんが戦闘中ムダに拡散させているM．O．

E．を回収する方が、
よっぽど宇宙の維持には効率的だと言う結論が出てね」
『あ……！　なーる、そりゃ共存共栄だわな』
「え……？」
呆然とする巨大少女を置き去りにして、
二匹の如何わしい異星人がぶっちゃけトークを展開する。
「ざっくり試算してみたんだけど、アルティメットマミさんが戦闘するごとに、
この宇宙全体の寿命を数億年ほど延命させる事が可能だよ」
『数億年!?　マジかよキュバヤシ？』
「ああ、大マジだ。
しかもそれは彼女の活躍が、この見滝原の一部に限定された場合の話だ。
もしも彼女がこのまま順調にアイドル化して、全国ネット、
いやさ全世界生中継と言う事態にまで漕ぎ着けたならば……」
『その分だけ彼女の発散するM．O．E．は天文学的に跳ね上がり……、
ほ、本当にこの宇宙は救われる!?』
「その通り。
アルティメットマミさんはまさに、この世界に降り立った最高の救世主だ。
彼女の尊い羞恥心と引き換えに、あまねく生命には無限の繁栄が約束される事だろう。
だから巴マミ、この宇宙のために喜んで犠牲になってよ！」
「～～～～～～ッッッ!!??　かッ!?　勝手にしなさいよ!!」
ヤケクソ気味にズンズンと大股で大地を揺らし、巨大乙女が怪獣の下へと迫る。

「ようし！　イクよつぼみ先輩!!
アルティメットマミさんに私たちの絶唱を届けるんだ！」

「アラホイサッサ～っす！　ところでヴィヴィ、次のコミッケでは是非、このアルティメットスーツを着て……」
「うるさい、そんなこっ恥ずかしいモノ、誰が着るのよ！」
「わ、悪いよヴィヴィアン、マミさんに聞こえちゃうよ～」
「さて、ヤルわよ町内会長、私たち大人の仕事を見せつけてやるのよ」
「合点だ！　え～マミさんわたあめにマミさん焼きそば、マミさん救いはいかがっすかァ――！」
「高校生特派員、諸星真、出撃!!」
「頑張れェ――ッ！　アルティメットマミさん巨乳――ッ!!」
「落ち着いてください岡村さん!?　貧乳のマミさんなんて居ません!!」
「ズバリ！　乳タイプの修羅場が見られるでしょう！」
「ショウさん相変わらず芸風広いッスね～」
「ようし、それならマミさんのテーマは、やはり僕に弾かせて貰おう！」
「か、上条くん!?　いつウィーンから戻られたんですの？」
「見滝原がダメになるかどうかの瀬戸際なんだ！　海外公演なんかやってられるか!!」
「見てあなた、アルティメットマミさんが戦うわ」
「ああ、本当に娘によく似ている、あれ？　そう言えばマミはどうした？」
「ヒャッハーッ!!　マスターロリのアンコールだァ　ステージを開けろォーッ!!」
「やめてェマミさんッ!!　まどゴンは何も悪くないのよォ――――――ッ!!」
「ウザってえッ！　寝てろ危篤患者!!」
「まみあん！　まみあん！」
「そうだよタッくん、私たちの最高の先輩なの」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお――

――ッ!!!!!」

燃え盛る熱狂の中、中沢少年一世一代の雄叫びが再びエントロピーを凌駕して、

見滝原商店街名物【アルティメット☆マミ塾旗】が、遥かな天空へとそそり立つ。

朋友の勇姿を見届けた上条が、愛用のバイオリンをゆっくりと構える。

――そして見滝原の空に、再び命溢れるマミさんのテーマが響き始めた。

「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」

「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」

「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

「ガンバレー！　アルティメットマミさん！」「あなたの後ろには私たちがついているわ！」

「私たちの未来を！」「大切な友達を！」「ここちょっと手ぇ抜きすぎじゃねえ！」

「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」

「さーるてぃー　ろいやーりー♪　たまりーえー　ぱーすてぃあらーやー　れーすてぃんがー♪」

「フレェ――ッ　フレェ――ッ　マーミーさんッ！」

「フレェ――――ッ　フレェ――――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――――ッ　フレェ――――ッ　マーミーさんッ！」
「フレェ――――ッ　フレェ――――ッ　マーミーさんッ！」
少女たちの無垢なる歌声が、男たちの命の叫びが輪唱となり、
巴マミの胸の奥で柔らかな鼓動を刻み始める。

「こ、こんな事いつまでも続けてたら、本当に私、お嫁にいけないじゃない……」
『大丈夫だマミ、
健やかなる時も病める時も、
たとえ君がオバサンになっても、私はずっと君の傍にいるぞ☆』
「絶対に　い　や　あ　あ　あ　あ　あ　ぁ　あ　ぁ　あ　ぁ　ぁ　ぁ　～～～～～～～!!」

魂を震わす乙女の叫びが、見滝原に、日本に、アジアに、地球に、太陽系に、銀河に、
そして遥か宇宙の彼方にまで響き渡り、新たなる奇跡の物語の始まりを告げる。

……どうやら、彼女とＵＦＯマンの物語は、もうちょっとだけ続くようです。

（ＵＭ☆アルティメットマミさん　ていろ・ふぃなーれ♪）